千葉県八千代市

西山遺跡

－埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 23 年 12 月

加藤　三守

株式会社　ロケット

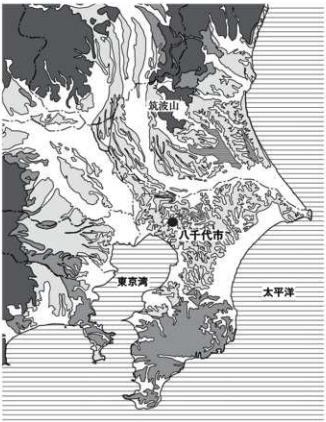
八千代市遺跡調査会

千葉県八千代市

にしやま

西山遺跡

－埋蔵文化財発掘調査報告書－



平成 23 年 12 月

加藤　三守

株式会社　ロケット

八千代市遺跡調査会

例　言

1　本書は，店舗建設のための開発事業に先行して実施した埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は，千葉県八千代市村上字西山881-45外に所在する西山遺跡（遺跡番号　八千代市No.196）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は加藤三守氏及び株式会社ロケットの委託を受け，八千代市遺跡調査会が実施した。

4　発掘調査及び整理作業は，下記の期間及び担当者により実施した。

確認調査	平成元年9月18日	～	平成元年9月26日	八千代市教育委員会実施
本調査	平成2年1月16日	～	平成2年4月6日	担当　蕨　茂美
整理作業	平成20年7月1日	～	平成23年12月27日	担当　秋山利光

5　整理作業は，遺物の実測を秋山利光と立松紀代美が行い，トレースを立松が行った。また，遺物の写真撮影・本書の執筆・編集を秋山が行った。

地形図及び遺構の挿図は，コンピューターにより作図したものを用いている。また，遺物の写真についてはデジタルカメラで撮影したものを図版として使用している。

6　本書で使用した地形図は，下記のとおりである。

中表紙　千葉県発行『千葉県の歴史 資料編 考古4(遺跡・遺構・遺物)』「2部2章図2」を参考に作図

第1図　国土地理院発行　1/50,000「佐倉」（平成10年発行）

第2図　八千代市発行　1/2,500「八千代都市計画基本図」№15・№16（平成13年修正）

第3図　八千代市発行　1/2,500「八千代都市計画基本図」№16（昭和54年作図）

第4図　大日本帝国陸地測量部発行　1/20,000「下志津原」（明治36年測図・明治43年発行）

第5図　八千代市発行　1/2,500「八千代都市計画基本図」№16（昭和54年作図）

を縮小・拡大し加筆している。

7　本書の遺構実測図における用例は，以下のとおりである。

(1)現地における確認調査及び本調査での方眼杭は，任意の方角で設置している。そのため，本書の挿図における北の方位表示は現地で実測した図面と都市計画基本図とを図上でおおむね整合させて得た都市計画基本図の座標北を用いている。そのため，挿図中の方位及び主軸等の方位度数は正確なものではない。

(2)遺構図面の縮尺は竪穴住居跡を1/80，カマドを1/40，土坑を1/40とすることを基本とした。

(3)遺構図中の破線は推定復元線を示す。また，記号等は図中に凡例を示した。

8　本書の遺物実測図における用例は，以下のとおりである。

(1)遺物実測図の縮尺は以下を基本とした。

完形土器実測図　1/4　　鉄器実測図　1/3～3/4　　石器・石製品実測図1/3

(2)遺物実測図中の網掛けによる表示は以下のとおりとした。

土師器断面　赤彩　黒色　須恵器断面

(3)遺物観察表及び本文中の[　]は現存値，(　)は復元推定値を表している。

9　本遺跡の発掘調査に伴う出土品，図面及び写真等の記録類は八千代市教育委員会で保管している。

目　　次

例　言　　目　次
第Ⅰ章　遺跡と調査の概要…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　遺跡の立地とこれまでの調査…… 1
　第３節　周辺の遺跡…… 5
　第４節　確認調査の概要…… 7
　第５節　本調査の方法と経過…… 7
第Ⅱ章　遺構と遺物……11
　第１節　古墳時代の竪穴住居跡……11
　2号住居跡
　5号住居跡
　6号住居跡
　第２節　平安時代の竪穴住居跡……21
　1号住居跡
　3号住居跡
　4号住居跡
　第３節　土坑……38
　第４節　グリッド出土遺物……40
第Ⅲ章　まとめ……41
　報告書抄録……巻末

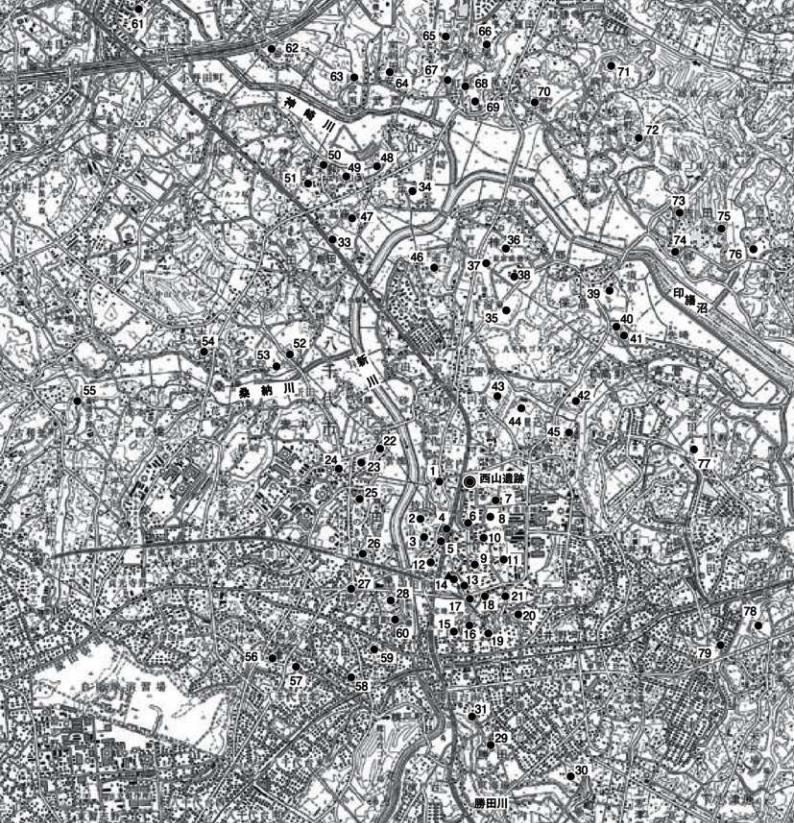
挿図目次

第１図　西山遺跡と周辺の遺跡
第２図　西山遺跡の位置…… 2
第３図　昭和54年頃の西山遺跡の周辺地形…… 3
第４図　西山遺跡の周辺地形…… 4
第５図　確認調査のトレンチ配置と検出遺構… 6
第６図　本調査区域と検出遺構…… 8
第７図　調査区の土層…… 9
第８図　古墳時代の竪穴住居跡……11
第９図　2号住居跡 ……12
第10図　2号住居跡炉・貯蔵穴……13
第11図　2号住居跡遺物・焼土・炭化材出土状況…15
第12図　2号住居跡出土遺物 ……15
第13図　5号住居跡 ……16
第14図　5号住居跡炉 ……17
第15図　5号住居跡遺物出土状況 ……18
第16図　5号住居跡出土遺物 ……18
第17図　6号住居跡 ……20
第18図　6号住居跡出土遺物 ……20
第19図　平安時代の竪穴住居跡……21
第20図　1号住居跡 ……22
第21図　1号住居跡カマド ……23
第22図　1号住居跡遺物出土状況 ……23
第23図　1号住居跡焼土・炭化材検出状況……24
第24図　1号住居跡出土遺物 ……24
第25図　3号住居跡 ……26
第26図　3号住居跡カマド ……27
第27図　3号住居跡遺物出土状況 ……28
第28図　3号住居跡カマド内遺物出土状況 ……28

第29図　3号住居跡焼土・炭化材・粘土検出状況…28
第30図　3号住居跡出土遺物(1)……29
第31図　3号住居跡出土遺物(2)……31
第32図　4号住居跡 ……33
第33図　4号住居跡カマド ……34
第34図　4号住居跡遺物出土状況 ……35
第35図　4号住居跡カマド内遺物出土状況 ……35
第36図　4号住居跡出土遺物 ……36
第37図　検出された土坑……38
第38図　1号・2号・3号土坑 ……39
第39図　グリッド出土遺物……40
第40図　兵庫鎖……43
第41図　西山遺跡周辺の古墳時代と奈良・平安時代の遺跡……44

図版目次

図版 1　1.調査区近景　2.トレンチ設定状況　3.トレンチ掘削状況　4.トレンチ土層
5.遺構検出状況　6.遺構検出状況　7.完掘状況(1)　8.完掘状況(2)
図版 2　1号住居跡
図版 3　2号住居跡
図版 4　3号住居跡(1)
図版 5　3号住居跡(2)・4号住居跡
図版 6　5号住居跡・6号住居跡(1)
図版 7　6号住居跡(2)・1号土坑・2号土坑・3号土坑
図版 8　1号住居跡出土遺物・2号住居跡出土遺物(1)
図版 9　2号住居跡出土遺物(2)・3号住居跡出土遺物(1)
図版10　3号住居跡出土遺物(2)
図版11　4号住居跡出土遺物(1)
図版12　4号住居跡出土遺物(2)・5号住居跡出土遺物・6号住居跡出土遺物・グリッド出土遺物



第1図　西山遺跡と周辺の遺跡

1.村上宮内遺跡　2.持田遺跡　3.正覚院館跡　4.境作遺跡　5.殿内遺跡　6.村上向原遺跡　7.大塚遺跡　8.大塚南遺跡　9.村上込ノ内遺跡　10.名主山遺跡
11.野路作遺跡　12.浅間内遺跡　13.白筋遺跡　14.根上神社古墳　15.沖塚古墳　16.沖塚遺跡　17.黒沢遺跡　18.黒沢古墳　19.黒沢池上遺跡　20.新林遺跡
21.二重堀遺跡　22.菅地ノ台遺跡　23.権現後遺跡　24.ヲサル山遺跡　25.北海道遺跡　26.白幡前遺跡　27.池の台遺跡　28.川崎山遺跡　29.勝田大作遺跡
30.新東原遺跡　31.仲山古墳群　32.内野第2遺跡　33.島田込の内遺跡　34.道地遺跡　35.上谷遺跡　36.境堀遺跡　37.向境遺跡　38.栗谷遺跡　39.おおびた遺跡
40.南谷遺跡　41.先崎遺跡　42.下高野新山遺跡　43.阿蘇中学校東側遺跡　44.平沢遺跡　45.堂ノ上遺跡　46.逆水遺跡　47.間見穴遺跡　48.佐山台遺跡
49.真木野向山遺跡　50.瓜ゃ作遺跡　51.松原遺跡　52.桑納遺跡　53.桑橋新田遺跡　54.本郷台遺跡　55.桑納川遺跡群　56.高津新山遺跡　57.内込遺跡　58.堀場台遺跡
59.小板橋遺跡　60.上ノ山遺跡　61.小室台遺跡　62.谷田木曽地遺跡　63.北の台遺跡　64.向新田遺跡　65.鳴神山遺跡　66.船尾白幡遺跡　67.西根遺跡
68.船尾町田遺跡　69.向ノ地遺跡　70.船尾城　71.松崎Ⅱ遺跡　72.松崎Ⅳ・Ⅴ遺跡　73.仲内遺跡　74.馬々台遺跡　75.東場遺跡　76.岩戸広台遺跡　77.西ノ台遺跡
78.神楽場遺跡　79.上座矢橋遺跡

第Ⅰ章　遺跡と調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成元年7月5日付けで加藤三守氏から八千代市村上字西山881-45外に面積3,284㎡の区域で店舗建設を開発目的として「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会が千葉県教育委員会(以下「県教委」という。)宛て，八千代市教育委員会(以下「市教委」という。)に提出された。

当該照会地は「周知の埋蔵文化財包蔵地」の範囲内に所在していたが，市教委が現地踏査を行ったところ，現況は荒地ではあり，すでに照会区域の大半がローム層を深くまで掘削されていた。しかし，掘削を受けていない区域で，現地表面に土師器などの遺物の散布が確認された。

平成元年7月 14 日付けで市教委は県教委にこれらの状況について意見を付して報告した。その結果，県教委から同年7月 31 日付けで，照会地の一部に，奈良・平安時代の集落跡1か所，面積約 1,400㎡について，埋蔵文化財が所在すると回答があり，照会者に回答を送付した。

平成元年８月 28 日付けで，同氏より工事主体者を(株)ロケットとし，照会の区域(実測値 3,283.82㎡)に対して文化財保護法(以下「法」という。)第 57 条の２第1項の規定による「土木工事の発掘届」が，文化庁長官宛に提出された。事業者との協議の結果，遺跡の現況を把握するための確認調査は，国庫及び県費補助を受けて，市教委が実施することとなった。そのため，市教委は埋蔵文化財が所在するとされた区域に対して，法第 98 条の２第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知」について県教委を経由して，文化庁長官に提出した。

確認調査は準備の整った同年９月 18 日に開始し，９月 26 日に終了した。(※文献2)

この確認調査の結果から，調査対象面積 1,400㎡の内 1,100㎡の区域について，遺構の所在が確認され，保存措置が必要とされた。そのため，事業者と再度協議し，店舗を建設するためには全域について記録保存せざるを得ず，保存措置の必要な区域 1,100㎡全域の発掘調査を実施することとなった。発掘調査には八千代市遺跡調査会があたり，平成元年 12 月４日法第 57 条第１項の規定による「埋蔵文化財発掘届」を提出し，準備が整った平成２年１月 16 日に本調査を開始した。

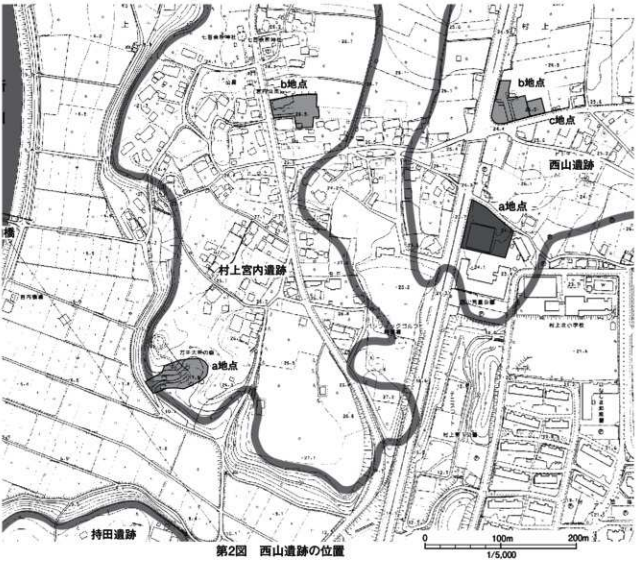
第２節　遺跡の立地とこれまでの調査

八千代市は千葉県の北西部に位置し，千葉市の中心部から北へ約 13km，都心から東へ約 30kmの距離にある。地理的には内陸に位置し，印旛沼西岸の下総台地と樹枝状に開析された沖積地で形成されている。

市域の中心を南北に貫く新川は印旛沼水系に属している。上流域で勝田川，下流域で平戸川と呼ばれていたが，その流れは千葉市長沼一帯を水源としており，南から北に流下し周囲の流れを集め，平戸付近で流れを東に変え，印旛沼に流れ込んでいる。この流域で高津川，桑納川，神崎川が左岸から合流し，これらの河川により市域内の台地を大きく大和田台・睦台・阿蘇台の３つに区分している。

参謀本部陸軍部測量局が明治 36 年に作成した「二万分一地形図」などによると，かつては市域の北部で印旛沼に面していたことがわかる。戦後の印旛沼の干拓工事で印旛沼の水域が大きく後退してしまったが，古来，市域は印旛沼から霞ヶ浦(香取の海)へ，さらに(現)利根川を下って太平洋まで通じていた。

現在，大和田で東京湾水系の花見川への疎水路が開かれ，台風などの増水時には印旛沼・新川の水を大和田の排水機場により花見川から東京湾に流し，印旛沼周辺の洪水を防止している。この疎水路を掘削した横戸周辺は印旛沼・太平洋水系と花見川・東京湾水系との分水界といえる。



第2図　西山遺跡の位置

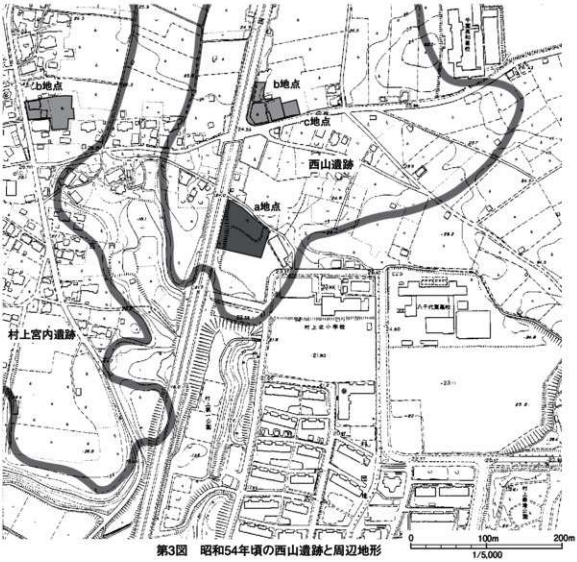
西山遺跡は八千代市域のほぼ中央に位置し，新川の右岸にあり，阿蘇台の台地上，村上地区に所在する。

本跡は新川の中流域で右岸から合流する上相女（かみそうな）谷津を遡り，すぐに北側に分岐する上相女北側谷津（かみそうなきたがわやつ）の北奥にあたる。標高 26 m 前後の台地上にあり，地質学上の地形面の区分では，下総上位面に立地する。

今回の調査地点は平成 13 年に修正された八千代都市計画基本図（第 2 図）では，造成工事等による土地の改変が激しく，谷津と台地の地形が不鮮明となっていた。さかのぼって，昭和 54 年に作図された八千代都市計画基本図（第 3 図）で確認すると本調査区の西側に谷津が大きく深く入り込んでいることは判読できたが，国道 16 号線と村上団地の造成工事により，本跡東側の地形は判然としなかった。明治 36 年に作成された「二万分一地形図」（第 4 図）でみると，北上する上相女北側谷津と，さらに分岐するいくつもの小谷津により開析された小さな舌状台地が形成され，その台地上に立地していることがわかった。このことから，本跡は東西に狭く，南側に突き出た小さな舌状台地に選地された集落であったとみられる。

西山遺跡では本報告書掲載区域が最初の調査区域であった。しかし，この調査の前年，昭和 63 年 4 月に本区域南側に隣接する区域（西山 881-1 外）5,851.78㎡に対する埋蔵文化財の照会が提出されていたが，すでに掘削削平されていたため，埋蔵文化財は所在しないと判断され，発掘調査は実施されなかった。

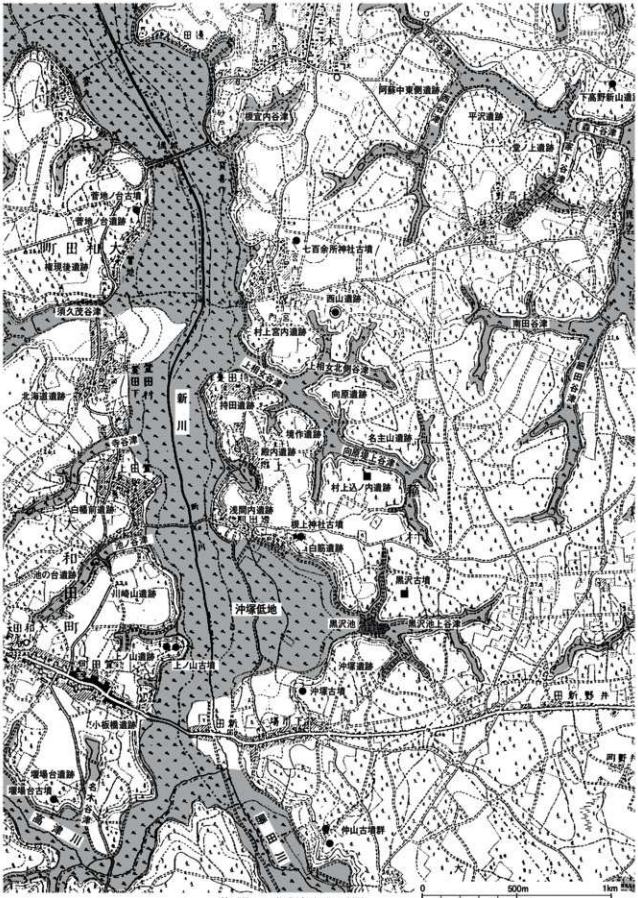
そのため，今回の調査が本跡最初の調査となった。その後，平成 17 年度に調査区域の北方約 100 m



第3図　昭和54年頃の西山遺跡と周辺地形

のｂ地点とｃ地点の２地点で確認調査が実施された（第３図）。調査は平成 17 年 12 月７日から 12 月 20 日まで連続して行われた。ｂ地点では 1,838㎡が調査対象区域となり，180㎡をトレンチによる発掘調査が行われた。また，ｃ地点では 409.8㎡の調査対象区域のうち 48㎡をトレンチによる発掘調査が実施された。検出された遺構はｂ地点とｃ地点にまたがって時期不明の溝が１条検出されているだけであり，遺物はまったく出土していない。（※文献３）

本跡における調査は，以上の３地点だけである。ｂ・ｃ地点でほとんど検出遺構・遺物がないことから，本報告の地点が西山遺跡における現時点での唯一の考古学的な成果といえる。



第4図　西山遺跡周辺の地形

第３節　周辺の遺跡

本跡で検出された遺構・遺物が古墳時代及び奈良・平安時代を主体としていることから，本節では当該期を中心とした周辺の遺跡について概観することとする。

本跡の立地する上相女北側谷津は上相女谷津に合流し，この上相女谷津の上流を向原堤上谷津が南東方向に向けて開析されている（第４図）。新川との合流地点近くの上相女谷津の右岸に，遺跡面積の広大な**村上宮内遺跡**(1)が立地している。遺跡の全容はいまだ不明であるが，調査地点が２地点あり，わずかではあるが部分的に明らかになっている。ａ地点は昭和 60 年に公共事業に関連して調査が行われた。調査区域が台地に切れ込む小さな谷部に限定されていたため遺構の検出はみられず，遺物もわずかであった。ｂ地点はａ地点から北北東に約 350 ｍ離れて位置している。台地の縁辺から約 200 ｍ離れた平坦部に立地し，2,043㎡の範囲の確認調査で古墳時代前期を主体とする 11 軒の竪穴住居跡や溝状遺構，土坑などが濃密に検出されている。（第２図）

上相女谷津の左岸には，**持田遺跡**(2)が台地上に広く展開している。発掘調査は平成５年にａ地点 990 ㎡が調査され，古墳時代後期の竪穴住居跡 12 軒ほか方形周溝状遺構などが濃密に検出された。また，平成９年にｂ地点 1,588㎡の確認調査が実施されたが，遺構は検出されず，わずかに土師器の散布がみられたのみであった。これ以降も，遺跡の南側で重複する**正覚院館跡**(3)とともに，たびたび調査が行われたが，遺跡全体の概要は未だ未調査な部分が多く，明らかとなっていない。

同じ左岸のやや上流には小さな谷津を隔てて，平安時代を中心とする**境作遺跡**(4)，この小谷津の奥にも平安時代を中心とする**殿内遺跡**(5)が隣接して立地している。境作遺跡は昭和 60 年９月から翌年１月にかけて確認調査・本調査が行われ，古墳時代後期や奈良・平安時代の竪穴住居跡が 13 軒ほど検出された。また，同じ開発区域にあった殿内遺跡でも確認調査・本調査が行われ，竪穴住居跡１軒が検出された。さらに，この調査区域に隣接するｂ地点でも平成２年から４年まで断続的に調査が行われ，奈良・平安時代を中心に 37 軒の竪穴住居跡，掘立柱建物１棟が検出された。千葉県都市公社で調査が行われた「八千代市村上遺跡群」（文献36）には「土取りの際に『たたら』が出土した遺跡であると認められ，土取り後消滅した」と故増田誠蔵氏からの伝聞として，紹介されている「辺田前たたら遺跡」がこの殿内遺跡周辺にあたると考えられる。このｂ地点の調査においても，鉄滓の出土がみられている。

上相女谷津から分岐する上相女北側谷津の左岸には**村上向原遺跡**(6)が立地する。村上団地造成時における調査では，村上Ｄ地点やＥ地点と呼称され弥生時代の竪穴住居跡が 10 数軒検出されているとの記載（文献36）もみられる。さらに，この谷津の奥には村上団地第１期造成工事において確認調査が行われ，現在の遺跡名では**大塚遺跡**（文献 36 による呼称はＡ区）(7)と**大塚南遺跡**（同Ｂ区）(8)が所在していた。弥生時代後期や奈良・平安時代の遺跡であったようだ。調査日誌によれば，Ａ区はトレンチ調査が行われ，遺物は出土していたが，遺構は検出されていない。また，Ｂ区では最終的に全面表土剥ぎが行われ「住居址」が発見されていたとみられる。

向原堤上谷津の左岸には**村上込ノ内遺跡**(9)が舌状台地全体に展開していた。昭和 48 年８月から 11 月に調査され，弥生時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡 155 軒，掘立柱建物跡 24 棟などが検出されている。この右岸にも昭和 46 年７月から８月に**名主山遺跡**(10)が調査され，平安時代の竪穴住居跡５軒，掘立柱建物跡６～７棟の小規模ではあるが，集落が展開している。さらに，この谷津の奥は南北両側に伸びており，その東側縁辺に**野路作遺跡**(11)が所在する。現在は村上団地内に公園として現状保存されている。

以上が上相女谷津の流域における遺跡である。（第４図参照）

この谷津の南側には沖塚低地が大きく開けている。この低地の北岸には縄文時代から奈良・平安時代

へと続く**浅間内遺跡**(12)が立地する。また，この遺跡に隣接して平安時代の竪穴住居跡が単独で検出された**白筋遺跡**(13)が所在する。周辺には市内でも数少ない前方後円墳の**根上神社古墳**(14)が所在し，史跡として市文化財の指定を受け，保存されている。

同低地南岸の台地は千葉段丘面と下総上位面で形成されている。千葉段丘面では遺構の検出された遺跡は現時点までには確認されていないが，下総上位面に立地する遺跡は貝化石岩で構築された石室を持つ**沖塚古墳**(15)や古墳時代の鍛冶遺構などが検出されている**沖塚遺跡**(16)が所在する。

この低地に流れ込む黒沢池上谷津の右岸には**黒沢遺跡**(17)，**黒沢古墳**(18)が所在し，左岸には**黒沢池上遺跡**(19)，**新林遺跡**(20)，**二重掘遺跡**(21)なども所在している。

さらに周辺の主な奈良・平安時代の遺跡では新川の対岸に広域な広がりを持つ萱田遺跡群とそれに隣接する遺跡がみられる。須久茂谷津，寺谷津，池ノ谷津周辺の台地上から**菅地ノ台遺跡**(22)，**権現後遺跡**(23)，**ヲサル山遺跡**(24)，**北海道遺跡**(25)，**白幡前遺跡**(26)，**池の台遺跡**(27)，**川崎山遺跡**(28)などの遺跡群が広範囲に展開している。

新川上流の勝田川流域では，**勝田大作遺跡**(29)，**新東原遺跡**(30)，**仲山古墳群**(31)が右岸に立地している。さらに上流の左岸では千葉市の**内野第２遺跡**(32)の調査が行われている。

新川の下流域では左岸に立地する**島田込の内遺跡**(33)，**道地遺跡**(34)。印旛沼南岸に立地する**上谷遺跡**(35)，**境掘遺跡**(36)，**向境遺跡**(37)，**栗谷遺跡**(38)，同じく南岸の**おおびた遺跡**(39)，**南谷遺跡**(40)，佐倉市**先崎遺跡**(41)などが知られる。

＊遺跡名の後の(　)数字は第１図「西山遺跡と周辺の遺跡」内の遺跡番号を示す。

検出遺構　本調査対象区域　**第5図　確認調査のトレンチ配置と検出遺構**

第４節　確認調査の概要

調査区の現況

調査区は国道 16 号線の東側に位置している。国道は台地を深く切り込んで建設されており，また，いつ行われたかは不明であるが，事業区域の南側の大半は 1m～ 2mほどの深さで掘削されている状況にあった。本跡は大半がこのような破壊を受けてわずかに残された区域であった。

調査の経過

平成元年９月 18 日トレンチの設定を開始し，同年９月 26 日に調査を終了した。

調査の方法

遺構や遺物の調査区域内での位置を特定するため，調査区全体に対し任意に 10 m方眼のグリッドを組み，この方眼を基準として計測している。確認トレンチは各グリッド内に 2m× 4mのトレンチを設定した。トレンチ名称は各トレンチにアルファベットのAから順に付して表している。また，国道 16 号線沿いに狭小な部分があり，ここに幅１m程の細長いトレンチを設定し，１トレンチと仮称している。

照会面積 3,284㎡の内，すでに掘削された区域を除く約 1,400㎡に対して，確認トレンチ 20 ヶ所，細長いトレンチ１ヶ所の掘削を実施している。掘削面積は約 160㎡で，調査対象面積に対し，11.4％程度となった。

確認調査の成果

確認調査の結果，古墳時代の住居跡が１軒，奈良･平安時代の住居跡が２軒，時期不明住居跡が３軒，ピット３基が検出され，出土遺物では古墳時代前期及び奈良・平安時代の土師器が出土した。この結果から，遺構が検出された区域の約 1,100㎡に埋蔵文化財が残存すると判断された。

第５節　本調査の方法と経過

調査区域

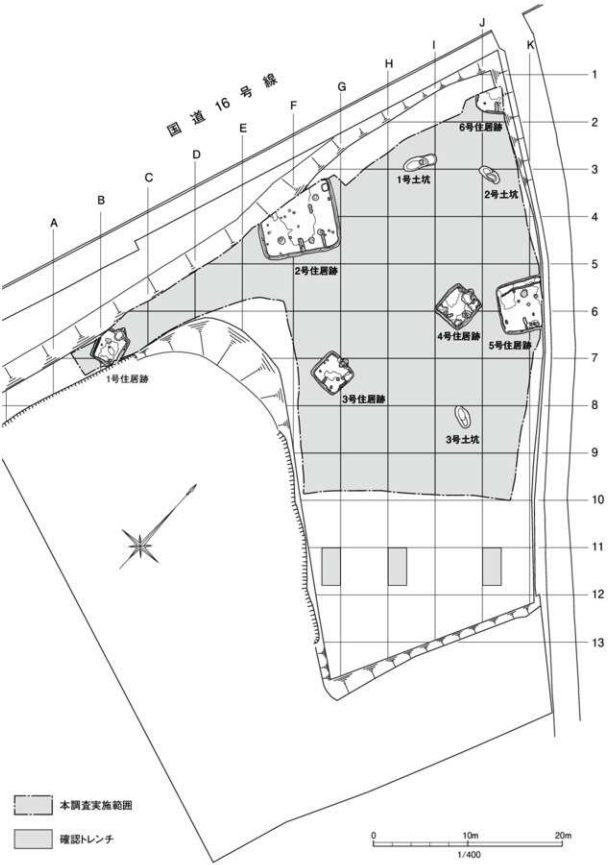
埋蔵文化財が残存すると判断された約 1,100㎡が保存協議の対象となり，本章第１節記載のとおり事業者との協議により，全域が発掘調査による記録保存を実施することとなった。

調査の方法

本調査のグリッドは確認調査で用いたグリッドと同一の方眼を測量の基準とした。この任意の 10m方眼により本調査区域を区切り，本調査区域での杭名称には略南北方向にアルファベットを用い，略東西方向にはアラビア数字により表示し，グリッド名称は北西隅の杭名称をもって表示し，調査を実施した。

調査の経過

本調査は，調査準備が整った平成２年１月 16 日に開始し，同年４月６日すべての調査を完了し，現地を撤収した。整理作業及び報告書刊行作業は平成 20 年７月１日から平成 23 年 12 月 27 日まで断続的に実施した。



第6図　本調査区域と検出遺構

調査区の土層

調査区域全体の土層は確認調査により把握され，下記のとおりであった。

Ⅰ層　表土層

Ⅱ層　黒色土層　黒色土粒主体にローム粒を少量含む。全体的にしまる。

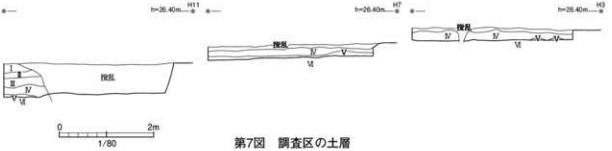
Ⅲ層　褐色土層　暗褐色土粒，ローム粒の混土層。粘性はあまりない。しまっている。

Ⅳ層　暗褐色土層　暗褐色土粒，ローム粒の混土層。Ⅲ層に比べローム粒の割合が少ない。しまる。

Ⅴ層　暗黄褐色土層　ソフトローム漸移層

Ⅵ層　ソフトローム層

Ｈ３グリッドからＨ９グリッドまでの地形をみると，現状でも１mから１m 50cmほど傾斜しているが，残存する土層によると，Ｈ３グリッドからＨ７グリッドまでで Ⅰ層からⅢ層が削平され，本来はさらに高低差があり，南東側に大きく傾斜する地形であることが伺えた。



第7図　調査区の土層

本調査の成果

確認調査で検出された遺構以外にも，本調査区域の表土を撤去した後，いくつかの落ち込みを検出したが，これらの落ち込みにサブトレンチを入れた結果，遺構と判断されないものが多数あった。最終的に，古墳時代前期の竪穴住居跡３軒，平安時代の竪穴住居跡３軒，時期不明の土坑３基を検出した。

第１表　西山遺跡　本調査検出遺構一覧表　　［　］は現存または調査区域内で計測できた計測値・（　）は復元推定値

遺構名称	略称	種別	位　置［グリッド名称］	規模（m）			平面形態	主軸方位	燃焼部	時代・時期	備考
				主軸	副軸	深さ					
１号住居跡	01D	竪穴住居跡	Ｂ７グリッド	3.70	3.30	0.35	長方形	Ｎ 17゜W	北壁－カマド	平安時代	
２号住居跡	02D	竪穴住居跡	Ｆ４グリッド	8.60	(7.60)	0.60	隅円長方形	Ｎ 36゜E	炉１ヶ所	古墳時代・前期	間仕切り・貯蔵穴
３号住居跡	03D	竪穴住居跡	Ｇ７グリッド	3.55	3.65	0.58	方形	Ｎ４゜E	北壁－カマド	平安時代	テラス状遺構
４号住居跡	04D	竪穴住居跡	Ｉ６グリッド	3.90	3.76	0.54	方形	Ｎ 05゜W	北壁－カマド	平安時代	
５号住居跡	05D	竪穴住居跡	Ｋ６グリッド	5.54	(5.50)	0.30	隅円方形	Ｎ 52゜W	炉３ヶ所	古墳時代・前期	拡張か
６号住居跡	06D	竪穴住居跡	Ｊ１グリッド	[2.90]	[2.90]	0.16	隅円方形又は隅円長方形	Ｎ 35゜W	不明	古墳時代・前期	
１号土坑	01P	土坑	Ｈ２グリッド	2.62	1.28	0.45	長楕円形	Ｎ 29゜E	なし	不明	重複か
２号土坑	02P	土坑	Ｊ３グリッド	2.42	1.14	0.49	長楕円形	Ｗ１゜S	なし	不明	重複か
３号土坑	03P	土坑	Ｉ８グリッド	2.52	1.29	0.50	長楕円形	Ｎ 65゜W	なし	不明	

＊主軸は竪穴住居跡の場合，カマドまたは炉のある面を通る方向とし，土坑の場合には長軸とした。

＊竪穴住居跡の規模は壁間の中点を結んだ線上の壁間を計測した。

＊方位は主軸と本報告における座標北（例言７(1)参照）との角度を計測した。

参考文献

1　佐々木　茂　　1981「八千代市の地形・地質」『八千代市文化財総合調査報告Ⅰ』八千代市教育委員会
2　八千代市教育委員会　1990『千葉県八千代市　市内遺跡群発掘調査報告　平成元年度』
3　八千代市教育委員会　2008『千葉県八千代市　逆水遺跡c北裏畑遺跡b,高津新田遺跡c,西山遺跡b,c,ほか－不特定遺跡発掘調査報告書Ⅴ－』
4　八千代市教育委員会　1982～『千葉県八千代市高津新山遺跡　－昭和56年度確認調査の概要－』Ⅰ～Ⅲ
5　八千代市教育委員会　1986『千葉県八千代市池の台遺跡　－都市計画道路3・3・7号線造成工事に先行する緊急調査－』
6　八千代市教育委員会　1987『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告書集』
7　八千代市教育委員会　1988『千葉県八千代市　市内遺跡群発掘調査報告　昭和63年度』
8　八千代市教育委員会　1993～『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告　平成4年度』～平成7年度
9　八千代市教育委員会　1998～『千葉県八千代市　市内遺跡発掘調査報告書　平成9年度』～平成19年度
10　八千代市教育委員会　2007『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書』
11　八千代市教育委員会　2007『千葉県八千代市　権現後遺跡　－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ－』
12　八千代市教育委員会　2008『千葉県八千代市　川崎山遺跡m地点発掘調査報告書』
13　八千代市教育委員会　2008『千葉県八千代市　川崎山遺跡n地点発掘調査報告書　－宅地開発事業に先行する埋蔵文化財発掘調査－』
14　八千代市教育委員会　2009『千葉県八千代市　白筋遺跡b地点発掘調査報告書』
15　八千代市教育委員会　2009『千葉県八千代市　殿内遺跡b地点　－公共事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ－』
16　八千代市教育委員会　2009『千葉県八千代市　白幡前遺跡c地点　－共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
17　名主山遺跡発掘調査団1972『名主山遺跡』
18　おおびた遺跡調査団　1975『おおびた遺跡　－八千代市少年自然の家建設地内遺跡－』
19　八千代市遺跡調査会　1980『池ノ台遺跡発掘調査報告　1979　八千代市都市計画街路3－4－1号線建設工事に伴う発掘調査報告書』
20　八千代市遺跡調査会　1999『千葉県八千代市　正覚院郎跡　－埋蔵文化財発掘調査報告書－』
21　八千代市遺跡調査会　1999『千葉県八千代市　川崎山遺跡　－埋蔵文化財発掘調査報告書－』
22　八千代市遺跡調査会　2001『千葉県八千代市　内込遺跡発掘調査報告書　－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査－』
23　八千代市遺跡調査会　2001～『千葉県八千代市　上谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』第1～5分冊
24　八千代市遺跡調査会　2001～『千葉県八千代市　栗谷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第1,2分冊
25　八千代市遺跡調査会　2003『千葉県八千代市　黒沢池上・新林遺跡発掘調査報告書　－土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
26　八千代市遺跡調査会　2003『千葉県八千代市　内込遺跡b地点発掘調査報告書　－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査－』
27　八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　向境遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
28　八千代市遺跡調査会　2004『千葉県八千代市　栗谷遺跡・役山東遺跡・雷南遺跡・雷遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』第3分冊
29　八千代市遺跡調査会　2005『千葉県八千代市　境堀遺跡　（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
30　八千代市遺跡調査会　2007『千葉県八千代市　勝田大作遺跡　－埋蔵文化財発掘調査報告書－』
31　八千代市遺跡調査会　2007『千葉県八千代市　浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡－八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』
32　八千代市遺跡調査会　2008『千葉県八千代市　小板橋遺跡　－b地点埋蔵文化財発掘調査報告書－』
33　八千代市遺跡調査会　2008『千葉県八千代市　川崎山遺跡　－i地点埋蔵文化財発掘調査報告書－』
34　八千代市遺跡調査会　2009『千葉県八千代市　南谷遺跡発掘調査報告書　－雷関連入路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査－』
35　大川清(日本窯業史研究所)1974『千葉県八千代市大字村上　黒沢台埋蔵文化財調査報告』
36　(財)千葉県都市公社　　1975『八千代市村上遺跡群』
37　(財)千葉県文化財センター　1984『八千代市権現後遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－』
38　(財)千葉県文化財センター　1985『八千代市北海道遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－』
39　(財)千葉県文化財センター　1986『八千代市ササル山遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－』
40　(財)千葉県文化財センター　1987『八千代市井戸向遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－』
41　(財)千葉県文化財センター　1989『八千代市仲ノ台遺跡・芝山遺跡　－東葉高速鉄道引き込み線および車庫用地内埋蔵文化財調査報告書－』
42　(財)千葉県文化財センター　1991『八千代市白幡前遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－』
43　(財)千葉県文化財センター　1993『八千代市坊山遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ－』
44　(財)千葉県文化財センター　1993『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡　－雲田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ－』
45　(財)千葉県文化財センター　1994『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他　－東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書－』
46　(財)千葉県文化財センター　1999～『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1　－八千代市高田込ノ内遺跡－』～報告書4
47　(財)千葉県教育振興財団　　2006『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書5　－八千代市高田込ノ内遺跡(2)・間見穴遺跡(3)・道地遺跡(2)－』

第Ⅱ章　遺構と遺物

今回の調査において検出された遺構は全体で竪穴住居跡6軒，土坑3基であった。時代は古墳時代の竪穴住居跡が3軒，平安時代の竪穴住居跡が3軒で，土坑の時代は特定することができなかった。

また，調査区域内から出土した遺物の総数は3,487点を数えた。内訳は土師器が最も多く，2,898点で全体の83.1％を占めていた。須恵器は142点，鉄器12点，土製品4点，石器3点が出土し，鉄滓が住居跡内外から258点も出土していた。そのほかに石，粘土，炭化物，カワラなども出土していた。

第1節　古墳時代の竪穴住居跡

古墳時代に属する竪穴住居跡は2号住居跡，5号住居跡，6号住居跡の3軒であり，いずれも前期に該当すると判断された。

これらの住居跡は調査区のほぼ北半に位置していた。2号住居跡は調査区の西側のほぼ中央に位置し，住居跡西側の一部，国道16号線側で破壊されていた。5号住居跡は調査区北東端に位置し，市道により北側の一部が破壊されていた。また，6号住居跡は調査区北端に位置し，国道16号線と市道により北側の大半が破壊されていた。

第8図　古墳時代の竪穴住居跡

２号住居跡（02D）（第９～12図・図版３・８・９）

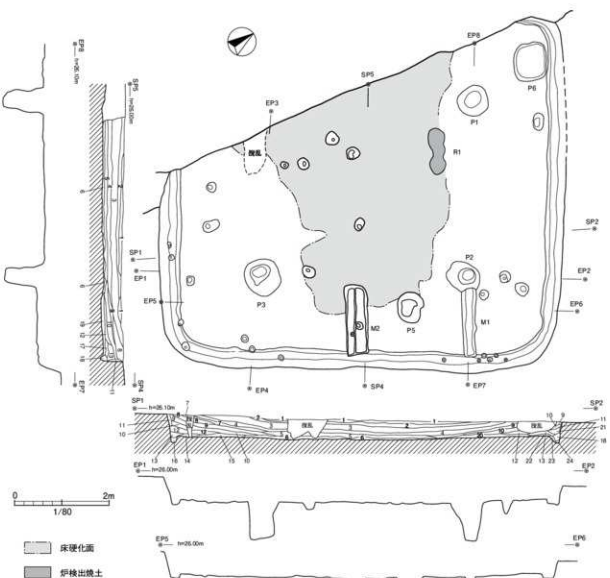
位置　Ｆ３，Ｆ４，Ｅ４グリッド　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　8m60cm×（7m60cm）×60cm

形状　隅円長方形　　**主軸方位**　Ｎ36°Ｅ　　**土層**　自然埋没

内部構造

住居跡の西側の壁の大半がすでに掘削され，破壊されていたため，**周溝**もこの部分では検出できなかったが，他の部分と同様に壁直下に浅く全周すると推定される。周溝の規模は，幅が20cm～30cm，深さ10cm～15cmほどであった。また，周溝内に小ピットが散見されたが，規則性はみられない。

主柱穴は３本が確認された。Ｐ１からＰ３が該当する。４本目は西側の破壊された部分に存在していたものとみられ，本来４本柱の住居であったと推定される。Ｐ１は68cm×62cmの円形，深さ86cm。Ｐ２は76cm×64cmの円形，深さ85cm。Ｐ３は80cm×73cmの円形，深さ80cmであった。そのほか主柱穴以外ではＰ５が南東壁側の２本の間仕切り間に位置し，65cm×50cmの円形で深さ24cmであった。性格は不明であるが，間仕切り溝との関連が想定される。



第９図　２号住居跡

炉はＰ１とＰ２との中間よりＰ１寄りの内側に位置する。床面で確認された焼土の範囲は約 100㎝×30㎝の細長い大きさのものであったが，炉底から焼土化の激しい部分が検出された。

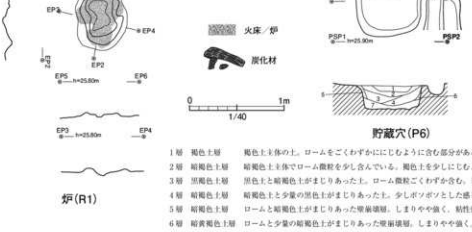
貯蔵穴は北隅の壁際で検出された。平面形状は約 80㎝× 70㎝の大きさの丸みを帯びた方形で，深さが約 25㎝であった。貯蔵穴の内部からは遺物の出土はみられないが，炭化材が検出された。覆土の堆積状態から住居跡と同時に埋没したものと推測された。

床硬化面は主柱穴間の内側から，さらに西側の主柱穴間外へも広がるように検出された。

東壁に壁と直行して，２本の**間仕切り溝**が検出された。溝１(Ｍ１)はＰ２と壁間を結ぶように掘削されていた。溝２(Ｍ２)はＰ２とＰ３との中間から壁まで延びていた。それぞれ 17㎝から 18㎝程の深さであった。

２号住居跡土層

１層	褐色土層	この層は第3層，暗褐色土層の影響を多大にうけている。第3層に近い感じの層である。ローム の微粒，暗褐色土の微粒を少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
２層	黒褐色土層	黒色土と少量の暗褐色土がまじりあった土。ローム の微粒を少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
３層	黒色土層	黒色土が主体となる層で暗褐色土を少しにじむように含む。ローム の微粒をやや多く含んでいる層。しまり強く，粘性やや強い。
４層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土がゴチャゴチャにまじりあった土。ローム の微粒を多く含む。色調は黒色度が強い。しまり強く，粘性やや強い。
５層	黒黄褐色土層	ローム と黒色土がゴチャゴチャにまじりあった土。部分的には黄色く，部分的には黒いといった感じの土。ローム の微粒を少し含む。しまり強く，粘性強い。
６層	黄褐色土層	ローム が主体となり，暗褐色土を少しにじむように含んでいる層。床直層である。ローム の微粒も少し含まれている。しまり強く，粘性強い。
７層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土がまじりあった土。ローム の微粒，気持ち含む。しまり強く，粘性やや強い。
８層	暗褐色土層	暗褐色土と黒色土がまじりあった土。部分的に黒色土を含んでいる。ローム の微粒も少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
９層	暗褐色土層	暗褐色土が主体で少量の黒色土。少量の黒色土を全にじむように含んでいる。ローム の微粒少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
10層	暗褐色土層	暗褐色土と黒色土が均一にまじりあった土といえる。ローム の微粒はほとんど含まない。しまり強く，粘性強い。
11層	暗黄褐色土層	壁崩壊層である。ローム と暗褐色土がゴチャゴチャにまじりあった土。しまり強く，粘性強い。
12層	黒褐色土層	黒色土が主体となり，暗褐色土を少しにじむように含む層。ローム の微粒はほとんど含まない。ローム が部分的に少しにじむように含む。しまり強く，粘性強い。
13層	黒色土層	黒色土が主体。少しローム がにじむように含まれる。ローム の微粒，多く含む。しまり強く，粘性強い。
14層	暗黄褐色土層	暗褐色土とローム がまじりあった土。しまり強く，粘性強い。
15層	暗褐色土層	暗褐色土と少量のローム が均一にまじりあった土。ローム の微粒はとんどなし。しまり強く，粘性強い。
16層	黒褐色土層	周溝内の覆土。黒色土が主体となり，ローム を少しにじむように含む。しかし色調は黒い。しまり強く，粘性強い。
17層	暗灰褐色土層	白色粘土のブロックに暗褐色土と少量の黒色土がゴチャゴチャにまじりあった土。しまり強く，粘性粘に強い。
18層	暗黄褐色土層	ローム と暗褐色土がゴチャゴチャにまじりあった土。周溝を埋めているものと考えられる。しまり強く，粘性強い。
19層	暗黄褐色土層	床面層と比較しては暗褐色土とローム が均一にまじりあった土。しまり強く，粘性強い。細密な層。かためられている層といえる。
20層	暗黄褐色土層	ローム を主体となり，暗褐色土を少しにじむように含む層。色調としては黄色味が強い。しまり強く，粘性強い。
21層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土がまじりあった土。部分的にローム を少しにじむように含む。しまり強く，粘性も強い。
22層	黄褐色土層	ローム が主体であり，暗褐色土をにじむように含む。しまり強く，粘性強い。
23層	黄色土層	板を止めるために人為的に埋めたローム が主体となる土。暗褐色土を少しにじむように含む。しかしほぼ主体はローム といえる。しまり強く，粘性強い。
24層	暗黄褐色土層	ローム と暗褐色土が均一にまじりあった土。しまり強く，粘性強い。



１層　褐色土層　　褐色土主体の土。ローム をごくわずかににじむように含む部分がある。しまりやや強く，粘性強い。
２層　暗褐色土層　　暗褐色土主体でローム の微粒を少し含んでいる。褐色土を少しにじむように含む。しまりやや強く，粘性強い。
３層　黒褐色土層　　黒色土と暗褐色土がまじりあった土。ローム の微粒ごくわずか含む。しまりやや強く，粘性強い。
４層　暗褐色土層　　暗褐色土と少量の黒色土がまじりあった土。少しボソボソとした感じの層。しまりやや弱く，粘性強い。
５層　暗褐色土層　　ローム と暗褐色土がまじりあった壁崩壊層。しまりやや強く，粘性強い。
６層　暗黄褐色土層　　ローム と少量の暗褐色土がまじりあった壁崩壊層。しまりやや強く，粘性強い。
７層　暗黄褐色土層　　ローム と暗褐色土がまじりあった土。しまり強い。粘性強い。

第 10 図　２号住居跡炉・貯蔵穴

遺物出土状況

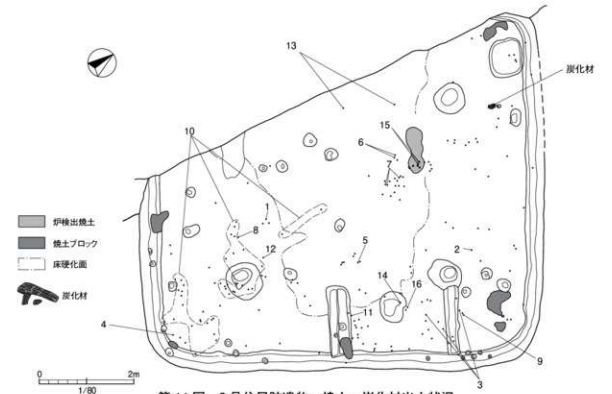
本住居跡から出土した遺物の総数は432点でナンバーを付けて取り上げた遺物は213点で，そのうち210点が土師器であった。98.5%を占める。それ以外は土製品1点，不明2点であった。そのほかに一括で取り上げた遺物は219点あるが，209点が土師器で95.4%を占めている。他に須恵器2点，土製品1点，礫4点，不明3点が出土した。

炉周辺では甕(6)，(7)が出土した。間仕切り溝周辺では小型甕(3)，壺(9)，甑底部片(11)，甕底部(14)，土製品(16)などいずれも小破片のものではあるが出土している。住居跡の中央では，硬化面上から小型甕(5)が出土し，炉のやや西側で器台(13)が出土した。大型の壺(10)は南隅からP3周辺から住居跡中央付近にまで広範囲に分散して出土していた。また，P3周辺では高坏(1)，埦(12)，壺の口縁(8)が出土し，さらに住居跡の南隅から小型甕(4)が出土していた。

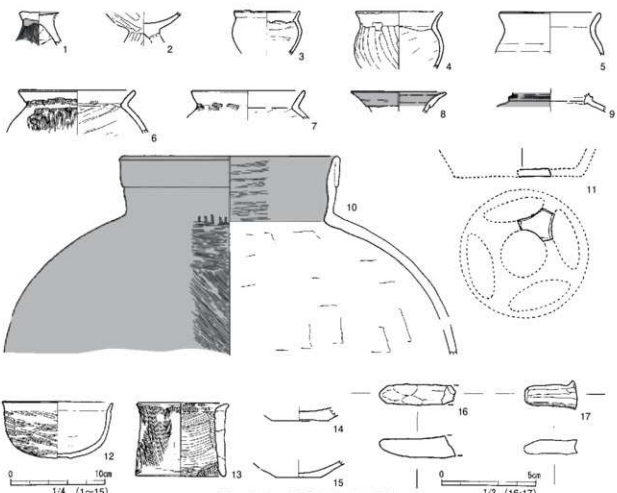
焼土は住居跡の隅や壁際のところどころで検出された。**炭化材**の出土もわずかで，北東壁側に小破片が検出され，そのほかには貯蔵穴内からも少量が検出されている。

第2表　2号住居跡出土遺物観察表(1)　　［　］は現存または計測できた計測値・(　)は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
1	土師器 高坏	口径　— 底径　— 高さ　[34]	20%程度	坏部内面にミガキ後，赤彩　脚部外面ミガキ後赤彩　内面はヘラナデ	外面　赤　7.5R4/6 内面　橙　5YR6/6	石英　細砂粒　少 焼成　良好	整理　2D-12 取上　3
2	土師器 高坏	口径　— 底径　— 高さ　[32]	30%程度	坏部，脚部にヘラケズリ痕を残す	外面　橙　5YR7/6 内面　橙　5YR7/6	石英・長石　細砂粒　少 焼成　良好	整理　2D-13 取上　105
3	土師器 小型甕	口径　(7.0) 底径　— 高さ　[46]	30%程度	胴部外面横方向のヘラケズリ後，ナデ　内面ヘラナデ　口縁内外上端部に横ナデ	外面　にぶい黄橙　10YR7/4 内面　にぶい黄橙　10YR5/3	長石・黒色細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　2D-08 取上　83,95,98
4	土師器 小型甕	口径　(9.2) 底径　— 高さ　[60]	35%程度	胴部外面縦方向のヘラケズリ　内面ヘラナデ　口縁内外に横ナデ	外面　淡黄　2.5Y8/3 内面　明赤褐　2.5YR5/6	石英・長石　細砂粒 焼成　良好	整理　2D-02 取上　49
5	土師器 小型甕	口径　(10.8) 底径　— 高さ　[45]	20%程度	口縁内外に横ナデ　胴部内外面ナデ	外面　にぶい赤橙　10R6/3 内面　橙　2.5YR6/6	石英　細砂粒　少 金雲母　細片　少 焼成　良好	整理　2D-04 取上　178
6	土師器 甕	口径　(12.4) 底径　— 高さ　[44]	10%程度	球形の胴部から頸部で「く」の字状に屈曲し，口縁が直線的に開く　胴部外面には縦方向のハケ整形　口縁内外には横ナデ　胴部内面にはヘラナデ	外面　にぶい橙　5YR6/4 内面　にぶい橙　5YR7/4	石英・長石　細砂粒　少 焼成　良好	整理　2D-05 取上　160,161
7	土師器 甕	口径　(12.0) 底径　— 高さ　[29]	10%程度	頸部で「く」の字状に屈曲し，口縁が直線的に開く　胴部外面には縦方向のまばらなハケ整形　口縁内外には横ナデ　胴部内面にはナデ	外面　にぶい赤橙　10R6/4 内面　にぶい橙　2.5YR6/4	石英・黒色細砂粒 焼成　良好	整理　2D-03 取上　151,165,168
8	土師器 壺	口径　(10.0) 底径　— 高さ　[23]	20%程度	頸部で大きく開く二重口縁　ハケ整形後ナデ　口縁の内外全体を赤彩	外面　赤　10R4/6 内面　赤　10R5/8　黒変有り	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　2D-09 取上　63
9	土師器 壺	口径　— 底径　— 高さ　[19]	10%以下	頸部に段を有する　整形はナデ　外面には赤彩	外面　赤　10R5/8 内面　赤橙　10R6/6	石英・長石・黒色等　細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　2D-10 取上　163
10	土師器 壺	口径　(23.4) 底径　— 高さ　[20.8]	40%程度	大きな丸みをもった胴部から急速にすぼまり，頸部で直立し，そのまま口縁で折り返す二重口縁　外面は口縁から頸部にかけて横・斜方向のナデ　胴部の上端から上位に縦位，横方向のミガキ　中位から斜方向のミガキ　内面は口縁から頸部まで横方向の横いミガキ　胴部はヘラケズリ，ヘラナデによる整形　外面全面と口縁から頸部までの内面に赤彩　口縁内面にタール状のものが付着	外面　赤　7.5R4/8　胴部内面にぶい橙　7.5YR7/3	石英・長石　小・細砂粒　多 焼成　良好	整理　2D-17 取上　17,18,24,26,27,29,31,32,33,34,35,36,37,38,41,42,43,44,46,47,48,49,54,55,56,58,60,62,64,65,66,69,71,72,73,一括
11	土師器 甑	口径　— 底径　(13.6) 高さ　—	10%以下	甑底部片の一部と推定される	外面　褐灰　10YR4/1 内面　黒　10YR1.7/1	石英　細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　2D-11 取上　182
12	土師器 埦	口径　11.6 底径　3.5 高さ　5.8	70%程度	口縁部がわずかに短く外反　底部小さく，わずかに上げ底　体部外面はミガキ　内面ヘラナデ　口縁内外横ナデ	外面　明赤褐　2.5YR5/6 内面　にぶい橙　2.5YR6/4	石英　小破片　やや多 焼成　良好	整理　2D-01 取上　17，一括
13	土師器 器台か	口径　9.8 底径　9.6 高さ　7.8	70%程度	脚よりほぼ直線的に立ち上がり，器受部で短く外反する　整形は外面でハケ整形，内面は目の粗いハケ整形	外面　にぶい黄橙　10YR5/3 内面　にぶい黄橙　10YR6/4	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　2D-16 取上　162,195



第 11 図　２号住居跡遺物・焼土・炭化材出土状況



第 12 図　２号住居跡出土遺物

第3表　2号住居跡出土遺物観察表(2)

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
14	土師器 甕	口径 — 底径 6.0 高さ [14]	10%以下	整形は外面でハケ整形　内側はハケ整形後ナデ	外面　にぶい橙 7.5YR7/4 内面　にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石・細砂粒　多 焼成　良好	整理　2D-06 取上　85
15	土師器 甕	口径 — 底径 (4.8) 高さ [1.8]	10%以下		外面　橙 7.5YR6/6 内面　にぶい橙 7.5YR7/4	石英　細砂粒　多	整理　2D-07 取上　141,169
16	土製品	長さ [4.1] 幅 1.1	—	指頭による整形	外面　にぶい黄橙 10YR7/3	石英・長石・細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　2D-14 取上　164
17	土製品	長さ [2.8] 幅 1.1	—	指頭による整形　ヘラ整形	外面　明赤褐 5YR5/6	石英・長石・細砂粒　少 焼成　良好	整理　2D-15 取上　一括

5号住居跡（05D）（第13～16図・図版6・12）

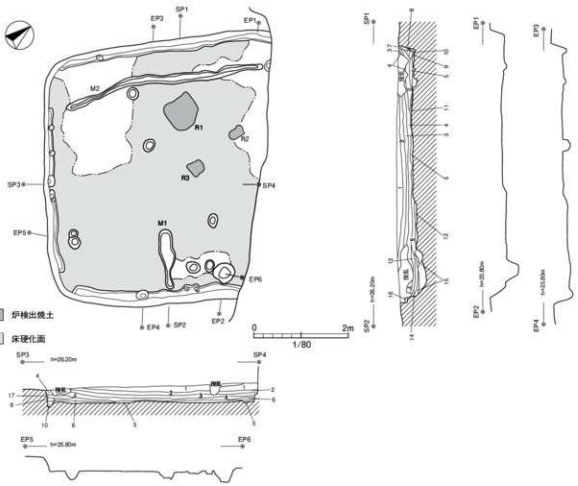
位置　J5・6，K5・6グリッド　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　5m54cm×（5m50cm）×30cm

形状　隅円方形　　**主軸方位**　N 52°W

土層　自然埋没

内部構造

周溝は住居跡の隅の部分で検出されなかったが，壁直下に浅く全周すると推定される。幅は15cm～20cmで，深さ10cmほどであった。また，周溝内に小ピットがいくつか検出されていたが，明瞭な規則



第13図　5号住居跡

性は確認できない。北西壁側の80cm内側に周溝の一部らしき溝２（Ｍ２）が検出された。住居が拡張される前の建替え前の周溝と推定される。深さは10cm程である。建替え前の住居は約４m 80cm×（５ｍ）ほどと推定される。

床面から明瞭な**主柱穴**は確認されていない。また，**貯蔵穴**も調査された範囲では検出されていない。

炉はＲ１からＲ３の大小３ヶ所検出された。住居跡中央よりやや北西側に位置する。確認された焼土の大きさは炉１（Ｒ１）で約 85cm× 70cm，炉２（Ｒ２）で約 35cm× 20cm，炉３（Ｒ３）で約 40cm× 35cmの大きさであった。炉１には主体となる窪みが２ヶ所確認され，それぞれ約 85cm× 55cm，約 50cm× 25cmの浅いピットであった。火床部はこの両方にまたがり，約 78cm× 65cmの範囲で大きい側のピットを主体として炉全体に広がることが確認されている。炉２は約 48cm× 40cm，火床部約 32cm× 25cm。炉３は約 35cm× 25cmで，火床部は小さなものが数ヶ所みられ，大きいもので約 35cm× 30cmの範囲で検出された。炉１には，炉底上面に焼土層の堆積がみられたが，炉２，３には検出されていない。

床硬化面は主軸の中央一帯に広がり，溝２（Ｍ２）をまたいで壁から壁まで検出され，さらにその続きが南隅から南西壁に沿って広がるように検出された。床が硬化されていない部分は炉の両脇だけであった。

5号住居跡土層

1層	黒褐色土層	黒色土と暗色土が混じり合った土。黒色土の量が多いため色調は黒い。しまり強く，粘性普通。
2層	暗褐色土層	黒色土と暗褐色土が少しブチャブチャとした感じで混じり合った土。しまり強く，粘性普通。
3層	暗褐色土層	暗褐色土が主体となり，少し褐色土を含む。ロームの微粒をほんの少し含む。しまり強く，粘性普通。
4層	暗褐色土層	暗褐色土と少量の黒色土が混じり合った土。均一に混じり合ってはいない。しまり強く，粘性普通。
5層	暗黄褐色土層	ロームと少量の暗褐色土が混じり合った土。しまり強く，粘性強い。床面層。
6層	黒褐色土層	黒色土が主体となり，暗褐色土を少し含んでいる層。しまり強く，粘性普通。
7層	暗黄褐色土層	ロームと暗褐色土が混じり合った土。壁崩壊層である。
8層	暗褐色土層	暗褐色土と褐色土が混じり合った土。ロームはあまり含まれない。しまり強く，粘性普通。
9層	暗黄褐色土層	暗褐色土とロームが均一に混じり合った土。ロームの微粒を少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
10層	暗黄色土層	薄ったロームの主体層である。しまり粘性強い。
11層	暗赤褐色土層	炉の上面の層。暗褐色土と焼土が混じり合った土。焼土はにじむような感じで含む。しまり強く，粘性は普通。
12層	暗黄褐色土層	ロームが主体となり，少し暗褐色土を含んでいる層。ひょっとしたら床の掘り過ぎかもしれない。しまり特に強い。粘性強い。
13層	暗褐色土層	暗褐色土と少量の黒色土が混じり合った土。ロームもほんの少し含む。ローム微粒極少量含む。しまり強く，粘性普通。
14層	暗褐色土層	暗褐色土が主体となり，ロームの微粒又ロームの大粒から小粒まで多く含む。しまり強く，粘性やや強い。
15層	暗褐色土層	暗褐色土が主体でロームを少しにじむように含んでいる。ローム小粒を少し含む。14層に比較するとその量は非常に少ない。しまりやや弱い，粘性普通。
16層	暗黄褐色土層	ロームと暗褐色土が均一に混じり合った土。しまり強く，粘性やや強い。
17層	暗褐色土層	暗褐色土と少量の黒色土が均一に混じり合った土。色調は少し黒さが強い。しまり粘性共に強い。

第 14 図　5 号住居跡炉

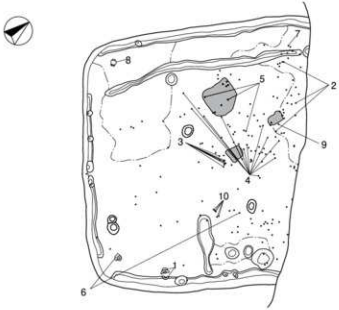
東南壁中央付近で壁と直行するように１本の**間仕切り溝**(Ｍ１)らしきものが検出された。Ｍ１は壁際から約 130㎝の長さ，やや不整形ではあるが，深さ 16㎝程掘られていた。

遺物出土状況

本住居跡から出土した遺物の総数は 290 点でナンバーを付けて取り上げた遺物は 199 点で，そのうち 194 点が土師器であった。97.4％を占める。それ以外では礫４点，不明１点であった。そのほかに一括で取り上げた遺物も 91 点あるが，80 点が土師器で 87.9％を占めている。他には須恵器１点，刀子１点，不明９点が出土している。

炉周辺には埦(2)，脚部(3)，甕胴部(4)，台付甕の台部(5)の一部が出土した。間仕切り周辺ではミニチュア甕(10)が出土した。南隅周辺では台付甕(6)がまとまって出土した。また，高坏(1)も南東壁際に出土していた。建替え前の周溝の外側では西隅で壺(8)が完形で出土し，甕底部(7)も北隅側で出土している。

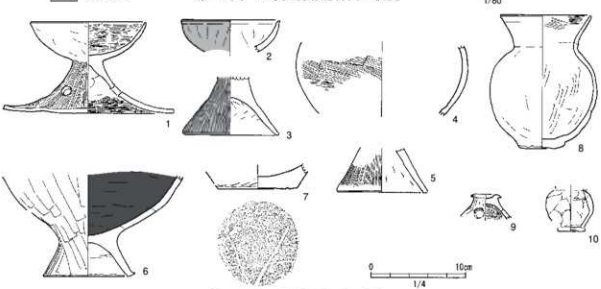
住居跡の覆土中から**焼土ブロック**は全く検出されていない。同様に**炭化材**の出土も確認していない。



炉検出焼土

第 15 図　５号住居跡遺物出土状況

0　2m
1/80



第 16 図　５号住居跡出土遺物

第４表　５号住居跡出土遺物観察表

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
1	土師器 高坏	口径　12.4 底径　18.1 高さ　9.7	100%	坏部外面ヘラケズリ後，軽くナデ，内面ミガキ 脚部外面ミガキ，内面成形後，裾をハケ整形 脚中位に三孔	外面　橙　2.5YR6/6 内面　橙　2.5YR6/8	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-02 取上　3
2	土師器 壺	口径　(10.4) 底径　— 高さ　[3.3]	30%程度	口縁内外横ナデ　体部外面縦位のヘラナデ　体部内面を横位のヘラナデ 外面を赤彩	外面　赤　10R5/6 内面　橙　7.5YR7/6	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-07 取上　11,26,117
3	土師器 脚部	口径　— 脚径　10.3 高さ　[6.2]	50%程度	脚部のみ残存　外面ミガキ，赤彩　内面をヘラナデ後，裾を横ナデ 上部との接合のため，突起を残す	外面　赤　7.5R4/6 内面　にぶい黄橙　10YR6/3	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-04 取上 135,136,150,171,172,173,179
4	土師器 甕	口径　— 底径　— 最大径 (18.3) 高さ　[7.5]	20%程度	胴部のみ残存 外面ハケ整形後，上半ナデ整形 内面は炭面が見れている	外面　にぶい黄橙　10YR6/4 内面　黄橙　10YR8/6	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-08 取上　29,48,50,59,61,65,108,111,120,121,122,130,132,134,155
5	土師器 台付甕	口径　— 底径　(9.6) 高さ　[4.7]	10%以下	台部のみ残存 外面ハケ整形，内面ヘラナデ，裾の内外面横ナデ	外面　橙　7.5YR7/6 内面　にぶい橙　7.5YR6/4	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-05 取上　44,58,129
6	土師器 台付甕	口径　— 底径　9.8 高さ　[10.7]	10%以下	胴部外面ヘラケズリ，内面ナデ 台部外面ヘラケズリ，内面裾を横ナデ 胴部内面に黒変している部分もあり，煤も付着	外面　にぶい橙　7.5YR6/4 内面　黒　7.5YR2/1	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-03 取上　2,101
7	土師器 甕	口径　— 底径　8.4 高さ　[1.6]	10%以下	底面に木葉痕	外面　にぶい黄橙　10YR7/3 内面　明赤褐　2.5YR5/8	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-06 取上　7
8	土師器 小型壺	口径　9.6 底径　5.0 高さ　14.1	90%程度	胴部外面ナデ，内面ヘラケズリ 口縁外面横ナデ，内面ヘラナデ	外面　にぶい黄橙　10YR7/4 内面　にぶい黄橙　10YR7/3	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-01 取上　1
9	土師器 ミニチュア 器台	口径　(32) 底径　— 高さ　[2.6]	40%程度	器受部が浅い皿状，脚がやや内湾気味に開き，中位に穿孔が２～３孔 脚部の外面はヘラケズリ，内面ハケ整形，器受部は手づくねのまま	外面　褐灰～黒褐　10YR4/1～3/1 内面　褐灰　10YR4/1	石英・長石 雲母粒　やや多 焼成　良好	整理　5D-09 取上　25
10	土師器 ミニチュア 甕	口径　— 底径　(2.8) 高さ　[4.5]	60%程度	手づくね 胴部外面ヘラケズリと指頭整形　内面も指頭整形しているが，つなぎ目を十分に成形できていない	外面　にぶい黄橙　10YR7/4 内面　にぶい黄橙　10YR7/4	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　5D-10 取上　139,140,141,142,153

６号住居跡（06D）（第17・18図・図版６・７・12）

位置　Ｊ１グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　[2m90cm]×[2m90cm]×16cm

形状　隅円方形又は隅円長方形　**主軸方位**　Ｎ 35゜W

土層　自然埋没

内部構造

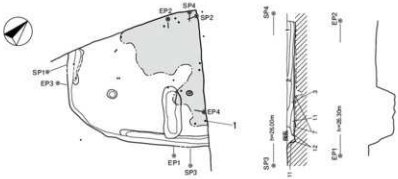
周溝は壁直下に浅く検出されるが，各隅部分では検出されていない。**主柱穴**は確認されなかった。**炉**も調査された区域からは検出されていない。**貯蔵穴**も同様に検出されていない。**床硬化面**は住居の中央一帯に検出されている。

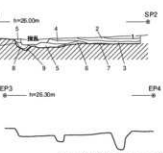
東南壁側に壁と直行するように１本の短い**溝**が検出されているが，床面と同じレベルで硬化面が重複して検出されているところから住居跡よりも古い遺構と判断される。溝の大きさは110㎝× 40㎝，深さ36㎝であった。

遺物出土状況

住居跡から出土した遺物の総数は62点でナンバーを付けて取り上げた遺物は22点で，そのうち19点が土師器であった。86.3％になる。それ以外は須恵器１点，礫２点であった。そのほかに一括で取り上げた遺物も40点あるが，37点が土師器で92.5％になる。他には須恵器２点，礫１点が出土した。

坏(1)は南東壁際から出土している。





1層　暗褐色土層　暗褐色土と黒褐色土が混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
2層　黒褐色土層　暗褐色土と少量の黒色土が混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
3層　暗褐色土層　暗褐色土と少量の黒色土そして少量の褐色土が混じり合った土。そしてロームを部分的ではあるが少しにじむように含んでいる土である。しまり強く、粘性強い。
4層　暗褐色土層　暗褐色土とロームが混じり合った土。ゴチャゴチャとした感じで混じり合っている。しまり強く、粘性やや強い。
5層　暗褐色土層　暗褐色土と少量のロームが混じり合った土。部分的に黒色土をにじむように含む。しまり強く、粘性強い。
6層　暗黄褐色土層　ロームと少量の暗褐色土が混じり合っている土。ロームの主体層といえる。しまり特に強く、粘性強い。
7層　暗黄褐色土層　ロームが主体となる床直層である。ロームの途中に暗褐色土を少しにじむように含まれる土である。床直層のため省略。
8層　黒褐色土層　黒色土と暗褐色土が混じり合った土とはいえ、均一に混じり合ったとはいえないが、それに近いくらいの混じり合い方である。しまり強く、粘性強い。
9層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となりロームが少しにじむように含んでいる土。しまり強く、粘性強い。
10層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり、ロームが少しにじむように含む。壁崩壊層である。しまり強く、粘性強い。
11層　黒褐色土層　黒色土と少量の暗褐色土が混じり合った土。ゴチャゴチャとした感じではあるが混じり合っていない。しまり強く、粘性普通。
12層　暗褐色土層　暗褐色土と少量のロームが少しゴチャゴチャとした感じで混じり合った土である。しまり強く、粘性普通。

床硬化面

0　2m
1/80

第17図　6号住居跡

第18図　6号住居跡出土遺物

第5表　6号住居跡出土遺物観察表

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No・取上No)
1	土師器 坏	口径　(22.0) 底径　— 高さ　[4.4]	10%以下	坏部外面を密なミガキ，内面は粗いミガキ 内外面とも赤彩　部分的にまだら	外面　赤　10R5/6 内面　赤橙　10R6/6	石英・長石 細砂粒　多 焼成　良好	整理　6D-01 取上　15
2	土師器 高坏	口径　— 底径　— 高さ　[4.7]	30%程度	坏部外面ミガキ，内面もミガキ 脚部外面ミガキ 坏部内外面に赤彩　脚部外面に赤彩，内面にも部分的に赤彩	外面　にぶい赤　7.5R4/4 内面　坏　同上 脚　にぶい橙　7.5YR7/4	石英・長石 細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　6D-03 取上　一括
3	土師器 甕	口径　— 底径　(6.8) 高さ　[20]	10%以下	外面ハケ整形，底面に木葉痕	外面　褐灰　10YR4/1 内面　浅黄橙　10YR8/4	石英・長石 細砂粒　まばら 焼成　良好	整理　6D-02 取上　一括

第２節　平安時代の竪穴住居跡

平安時代に該当する竪穴住居跡は，３軒確認されている。

１号住居跡は調査区南西端に位置し，両側を削平されて尾根状に細長く残った区域に位置する。住居の北西隅と南東隅が破壊されていたが，カマドも残存し保存状況は比較的良好であった。３号住居跡は調査区中央に位置し，保存状況は良好であった。４号住居跡は調査区中央のやや北側に位置し，良好に残存していた。

１号住居跡（01D）（第 20 ～ 24 図・図版２・８）

位置　Ａ６，Ｂ６・７グリッド　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　3m70cm×3m30cm×35cm

形状　長方形　　**主軸方位**　Ｎ 17°Ｗ

土層　住居の最下層に炭化材や焼土層が堆積し，その上層は自然埋没

内部構造

カマドは北壁中央のやや東寄りに付設されていた。カマドの火床部は壁ライン上に設置され，規模は1m 10cm× 90cmほどで，床面からの深さ 13cmほど皿状に掘りくぼめられていた。また，煙道は火床部端から壁面を外側に 40cmほど緩やかに傾斜して掘り込まれていた。カマドの袖は火床部両側に，壁から 45cmから 60cmほどの長さで残存していた。カマド内部は天井部の崩落土などが多量の焼土とともに埋没していた。

主柱穴は明瞭なものが確認されていない。住居跡の中央付近に 20cmほどの径をもつ小ピットが検出されているが，深さは 12cm～ 18cm程であった。

第 19 図　平安時代の竪穴住居跡

周溝は調査された範囲では全周する。幅は約 20cmから広いところでは 45cmほどあり，深さは最大でも 15cmほどであった。西側の壁際には内側にもう 1 条周溝が検出されている。幅は約 15cmで，深さは約 10cmあり，住居の西側を拡張するために，建替えた可能性もある。

床硬化面は住居の中央，カマド前面に約 80cm× 100cmの範囲で広がる。硬化範囲の中心に軟弱な部分がみられ，硬化面はドーナッツ状を呈していた。また，床面の一部が火を強く受け赤変化している部分が検出された。住居跡の覆土には，床面直上に多量の焼土と炭化材が堆積しており,住居そのものが火災又は焼失したと考えらる。

1 層　黒褐色土層　黒色土と褐色土と暗褐色土が混じりあった土。ローム の小粒もほんの少し含む。しまり強く，粘性やや強い。自然堆積層。

2 層　暗褐色土層　暗褐色土と褐色土が混じりあった土。ローム の微粒を点々と含む。焼土の微粒も1,2 点パラパラとしたような感じで混入。しまり強く，粘性強い。自然堆積層。

3 層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり，褐色土を少し斑状に含む層。炭の微粒，焼土の微粒はんの少し パラパラと混入。しまり強く，粘性やや強い。自然堆積層。

4 層　暗褐色土層　暗褐色土が主体で褐色土を少ししにじむように含む。ローム の微粒はほんの少し パラパラと混入。しまり強く，粘性強い。自然堆積層。

5 層　暗褐色土層　自然堆積層。暗褐色土が主体，色調は少し暗い。白色粘土を少ししにむように含む。焼土の微粒，炭の微粒を少し含む。ローム の小粒も少し混入。しまり強く，粘性強い。

6 層　暗褐色土層　人為的に投げ込まれた消火層。焼土や炭の微粒を多く含む部分がある。暗褐色土が主体で，色調も部分的に黒くなっている所と，そうでない所の混土層。しまり強く，粘性強い。

6a層　暗褐色土層　6 層と基本的にまったく同じだが，焼土の微粒がやや多く含まれるため分層した。しまり強く，粘性やや強い。

7 層　赤色土層　焼土のブロック，焼土のかたまり，まっかに焼けた焼土。人為的に投げ込まれた土が火熱をうけて焼土化したもの。

8 層　暗赤褐色土層　人為的に投げ込まれた消火層で少し火熱を多くうけているのが，焼土化している土があり，暗褐色土と焼土が混じりあった土層。しまり強く，粘性やや強い。

9 層　炭層　色調はまっ黒の所もあれば，暗褐色土が混じりあった所もある。柱とか屋根が焼け落ちた炭のかたまりが混含されている層といえる。焼土の微粒も少し含む。

10層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり色調は暗い。ローム も少ししにじむように混入。焼土，炭の微粒もパラパラ含む。人為的に投げ込まれたものと考えられる。しまり強く，粘性強い。

11層　暗褐色土層　暗褐色土とロームブロックが混じりあった土層。しまりふつう，粘性やや強い。

12層　暗赤褐色土層　これも焼土層。人為的に投げ込まれた土，そして火熱をやや多く受けているため，それが焼土化した。そのため部分的にではあるがあみが多い。炭の微粒が混入。全体的には暗褐色土と焼土がゴチャゴチャになった層。しまり強く，粘性ふつう。

13層　暗褐色土層　暗褐色土とほんの少しの焼土の微粒が混じりあった土。人為的に投げ込まれた土層の一部。3 ほど火熱をうけていないために焼土化しなかった層。しまり強く，粘性強い。

14層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり，ローム を少ししにむように含む層で自然堆積層である。焼土微粒と炭の微粒もほんの少しは含まれている。しまり強く，粘性強い。

15層　暗褐色土層　暗褐色土とロームが混じりあった土。自然堆積層である。しまり強く，粘性強い。

16層　暗褐色土層　暗褐色土とロームが混じり合った土。しかしこれも人為的に投げ込まれた土と考えられるが，焼土の包含は多くない。炭もほとんど入っていない。しまり強く，粘性ふつう。

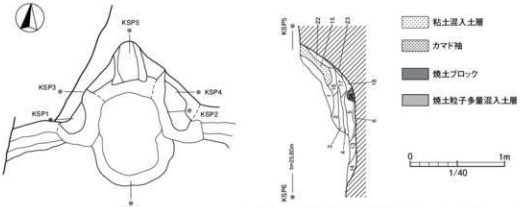
17層　暗黄褐色土層　ローム と少量の暗褐色土が均一に混じりあった土。自然堆積層である。しまり強く，粘性ふつう。

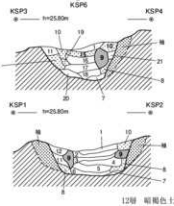
18層　黄褐色土層　ローム と暗褐色土が少量の暗褐色土が均一に混じりあった土。 床直層と考えていい。焼土，炭 なし。しまり強く，粘性強い。

19層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり，焼土を少ししにじむように含む。人為的に投げ込まれた土層。しかし炭化物は含まず，焼土が全体ししにじむように含む。しまり強く，粘性強い。

20層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となる層。やはり投げ込まれた土の一部である。しかし，焼土，炭の包含する量はきわめて少ない。しまり強く，粘性強い。

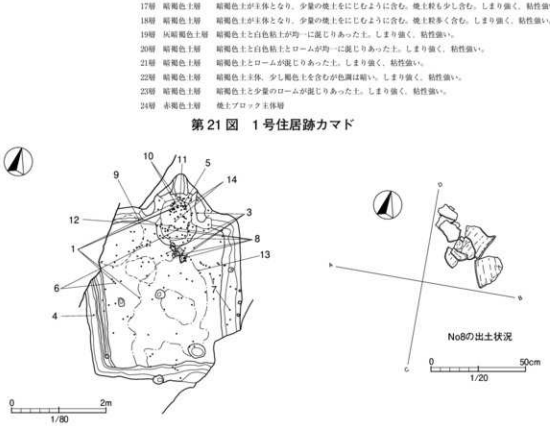
第 20 図　1 号住居跡





1層　黒褐色土層　黒色土と少量の白色粘土が混じりあった土。炭、焼土なし。しまり強く、粘性強い。
2層　暗褐色土層　暗褐色土内に少量の白色粘土、少量の焼土がにじむように含まれる。しまり強く、粘性強い。
3層　暗褐色土層　暗褐色土と少量の黒色土が混じりあった土。少量の焼土がにじむように含む。しまり強く、粘性強い。
4層　暗褐色土層　暗褐色土と少量の焼土が均一に混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
5層　暗褐色土層　暗褐色土と少量の焼土、少量の白色粘土が均一に混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
6層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となる。焼土、炭は微粒にて少し含む。しまり強く、粘性強い。
7層　暗黄褐色土層　ロームと暗褐色土が混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
8層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土が均一に混じりあった土。天井崩壊層である。しまり強く、粘性強い。
9層　暗赤褐色土層　焼土と暗褐色土が均一に混じりあった土。天井内側部と考えられる。しまり強く、粘性強い。
10層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土が混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
11層　暗褐色土層　暗褐色土と少量の白色粘土が均一に混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
12層　暗褐色土層　暗褐色土と褐色土が混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
13層　暗褐色土層　暗褐色土主体の土。しまり強く、粘性強い。
14層　暗褐色土層　暗褐色土と黒色土が混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
15層　暗灰褐色土層　暗白色粘土と暗褐色土が混じりあった土。天井崩落層です。しまり強く、粘性強い。
16層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり、少量の焼土、少量の白色粘土をにじむように含む。しまり強く、粘性強い。
17層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり、少量の焼土をにじむように含む。焼土粒も少し含む。しまり強く、粘性強い。
18層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり、少量の焼土をにじむように含む。焼土粒多く含む。しまり強く、粘性強い。
19層　灰暗褐色土層　暗褐色土と白色粘土が均一に混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
20層　暗褐色土層　暗褐色土と白色粘土とロームが均一に混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
21層　暗褐色土層　暗褐色土とロームが混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
22層　暗褐色土層　暗褐色土主体、少し褐色土を含むが色調は暗い。しまり強く、粘性強い。
23層　暗褐色土層　暗褐色土と少量のロームが混じりあった土。しまり強く、粘性強い。
24層　赤褐色土層　焼土ブロック主体層

第 21 図　1 号住居跡カマド

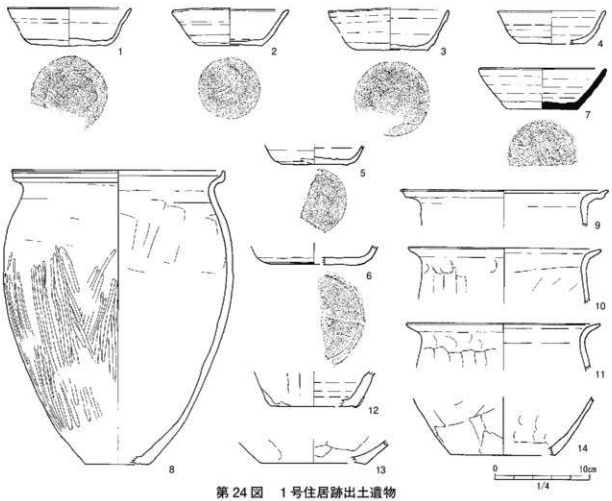


第 22 図　1 号住居跡遺物出土状況

遺物出土状況

本住居跡から出土した遺物の総数は444点で，ナンバーを付して取り上げた遺物は273点であった。そのうち土師器は248点あり，90.8%に達した。そのほかに，須恵器10点，石礫6点，鉄滓7点，不明2点であった。また，一括で取り上げた遺物は171点あり，そのうち土師器が144点84.2%を占め，須恵器8点，石礫12点，鉄滓2点，不明5点でほとんど同様の構成をしていた。

第23図　1号住居跡焼土・炭化材検出状況



第24図　1号住居跡出土遺物

カマド内部から出土した遺物は，坏(5)，甕(10)，甕(11)，甕(12)，甕(14)であった。また，カマド周辺から，甕(8)がカマドの火床前面の床面上にまとまって出土しており，一部はカマド内部からも出土していた。坏(3)，甕(9)もカマド周辺からの出土であった。

坏(1)はカマド内部からも出土するが，住居の西側にも破片が広がる。坏(6)も坏(1)と同様の出土傾向がみられた。坏(4)は西側の壁際から出土した。甕(13)，須恵器の坏(7)は東側の壁側から出土していた。

本住居跡は遺構内部から焼土と炭化材の出土が多く，住居内全域の広範囲に検出された。とりわけ，住居の中央やや南寄りで炭化粒子が濃密に検出された。

第6表　1号住居跡出土遺物観察表

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
1	土師器 坏	口径　(13.2) 底径　8.1 高さ　4.0	70%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面のヘラ削り　体部下端のヘラ削り	外面　黒褐　10YR3/1 内面　黒褐　10YR3/1	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　1D-01 取上 33,90,177,188,198
2	土師器 坏	口径　(12.4) 底径　6.6 高さ　3.9	75%程度	ロクロ成形　回転糸切りにより切り離し後，底面の回転ヘラ削り　体部下端1～2段のヘラ削り	外面　橙　5YR7/6 内面　橙　5YR6/6	石英・長石 雲母粒 少 焼成　良好	整理　1D-02 取上　一括 坏の内外面の一部に黒変がみられる
3	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　8.0 高さ　4.2 ～4.5	75%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面の回転ヘラ削り　体部下端のヘラ削り　坏内面底部に指頭による成形痕を残す	外面　にぶい黄橙 10YR6/3 内面　灰黄～黄灰 2.5Y6/2～4/1	石英・長石 雲母粒 やや多 焼成　良好	整理　1D-03 取上　2,10,16,104
4	土師器 坏	口径　(11.4) 底径　(7.0) 高さ　3.5	35%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面の整形不明　体部下端のヘラ削りも不明	外面　浅黄橙　7.5YR8/4 内面　浅黄橙 7.5YR8/4	長石 雲母粒　少 焼成　良好	整理　1D-05 取上　78
5	土師器 坏	口径　— 底径　(7.0) 高さ　2.1	40%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面を手持ちヘラ削り　体部下端も手持ちヘラ削り　体部がやや内湾気味に立ち上がる	外面　浅黄　2.5Y7/3 内面　灰黄 2.5Y6/2	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好　やや硬め	整理　1D-07 取上　180 器厚が薄く，異種感がある
6	土師器 坏	口径　— 底径　(9.2) 高さ　[2.3]	35%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面の回転ヘラ削り　底面外周にやや深い溝が残る　体部下端回転ヘラ削り	外面　橙　7.5YR7/6 内面　浅黄橙 7.5YR8/3	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　1D-06 取上　31,100
7	須恵器 坏	口径　(13.5) 底径　(7.6) 高さ　4.3	40%程度	ロクロ成形　切り離し後，底面ヘラ削り　体部下端もヘラ削り	外面　灰　N5/0 内面　灰　N5/0	石英・長石 砂粒 多 焼成　良好	整理　1D-04 取上　21,108,117
8	土師器 甕	口径　(22.6) 底径　(6.8) 高さ　30.9	50%程度	砲弾型の胴部の頂部から外反し，口縁端で直立する整形は外面で胴部上端から口縁部内を経て胴部内面上端まで横ナデ　胴部外面の中位から下半まで粗いミガキ　胴部内面はヘラナデにより平滑な仕上げ　中位から下半は成形のままで，粗い器面	外面　にぶい黄橙 10YR6/4 内面　にぶい黄橙 10YR7/4	石英・長石 大砂粒 多 雲母細片　少 焼成　良好	整理　1D-14 取上 48,82,102,126,141
9	土師器 甕	口径　(21.8) 底径　— 高さ　[3.8]	10%程度	胴部がほぼ垂直に立ち上がり，頂部で大きく水平に広がり，口縁端部で外反しながら立ち上がる整形は口縁部内外に横ナデ　胴部ヘラナデ	外面　にぶい橙 5YR6/4 内面　にぶい橙 7.5YR6/4	石英　大砂粒 多 金雲母細片　少 焼成　良好	整理　1D-08 取上　146 内側頂部付近まで煤付着
10	土師器 甕	口径　(20.4) 底径　— 高さ　[5.8]	10%程度	胴部が内傾気味に立ち上がり，頂部で緩やかに外反し，口縁で大きく開く 整形は胴部外面を縦位でヘラ削り　頂部には指頭での成形痕が残る　口縁部内外に横ナデ　胴部内面は斜位でヘラナデ	外面　赤橙　10R6/6 内面　にぶい橙 7.5YR7/4	石英・長石 雲母粒 多 焼成　良好	整理　1D-09 取上　164,165
11	土師器 甕	口径　(20.6) 底径　— 高さ　[5.3]	10%以下	胴部が内湾気味に立ち上がり，頂部で直立気味にやや外反し，口縁で大きく開く 整形は胴部外面を縦位でヘラ削り　頂部に指頭での成形痕が残る　口縁部内外に横ナデ　胴部内面はヘラナデ	外面　明赤褐 2.5YR5/8 内面　赤褐　2.5YR4/6	石英　雲母粒 多 焼成　良好	整理　1D-10 取上　191
12	土師器 甕	口径　— 底径　(9.0) 高さ　[3.8]	10%以下	胴部は底部から直線的に立ち上がる 整形は外面でヘラ削り　内側　ナデ	外面　にぶい橙 7.5YR6/4 内面　灰褐 7.5YR5/2	石英　小砂粒 多 金雲母細片　少 焼成　良好	整理　1D-12 取上　127 底面外面に付着物
13	土師器 甕	口径　— 底径　(11.0) 高さ　[2.5]	10%以下	胴部は底部から大きく開く 整形は底面でヘラ削り　胴部下端でヘラ削り	外面　灰黄褐 10YR6/2 内面　にぶい黄 2.5Y6/3	石英　雲母粒 少 焼成　良好	整理　1D-11 取上　118
14	土師器 甕	口径　— 底径　(11.0) 高さ　[6.2]	10%以下	胴部は底部から大きく開く 整形は胴部下端でヘラ削り　内面には指頭による成形痕　ナデ	外面　灰黄～明灰黄 2.5Y6/2～5/2 内面　にぶい黄橙 10YR7/4	石英　大小砂粒 多 焼成　良好	整理　1D-13 取上　175,194

3号住居跡（03D）（第25～31図・図版4・5・9・10）

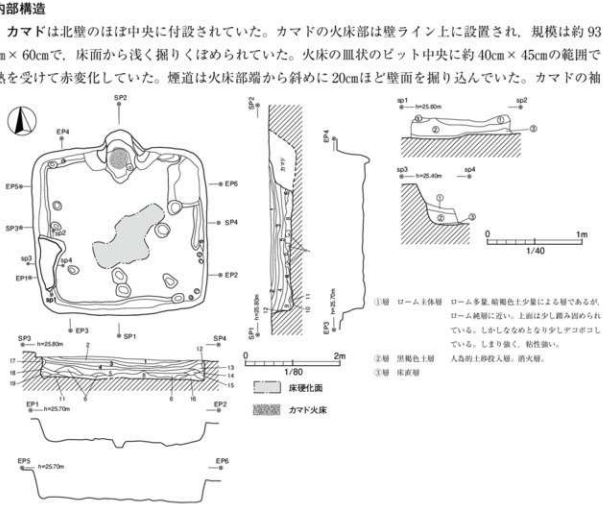
位置　F 7，G 7グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　3m55cm×3m65cm×58cm

形状　方形　　**主軸方位**　N 4°E

土層　自然埋没

内部構造

カマドは北壁のほぼ中央に付設されていた。カマドの火床部は壁ライン上に設置され，規模は約93cm×60cmで，床面から浅く掘りくぼめられていた。火床の皿状のピット中央に約40cm×45cmの範囲で熱を受けて赤変化していた。煙道は火床部端から斜めに20cmほど壁面を掘り込んでいた。カマドの袖



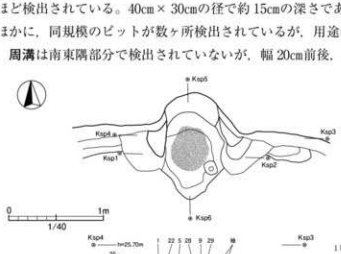
1層　黒褐色土層　自然堆積層。黒色土と暗褐色土が混じり合った土。ローム粒子を少し含む。しまり強く粘性やや強い。
2層　黒褐色土層　自然堆積層。黒色土と多量の暗褐色土が混じり合った土。ローム微粒を少し含む。ローム小粒もところどころに1，2点みられる。しまり強く，粘性やや強い。
3層　暗褐色土層　自然堆積層。暗褐色土が主体となり，白色粘土が少しにじむように含む層。ローム微粒少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
4層　暗褐色土層　自然堆積層。暗褐色土と少量の白色粘土が混じり合った土。ローム微粒が少し含む。しまり強く，粘性やや強い。
5層　暗褐色土層　消火のため人為的に投げ込まれた土層。暗褐色土で黒色土をやや多く含み，色調は暗い。炭の微粒を少し含むが，焼土の微粒はない。しまり強く，粘性やや強い。
6層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となる。人為的に投げ込まれた土層。焼土の微粒を多く含むためやや赤味がかった暗褐色土。しまり強く，粘性強い。
7層　暗赤褐色土層　焼土層である。人為的に投げ込まれた土が焼土化したもの。粒子どちょっとした塊まりで構成される。暗褐色土が混ざる。しまり強く，粘性やや強い。
8層　炭層　暗褐色土に炭が混じり合った土。人為的に投げ込まれた土。ローム微粒もほんの少し含む。焼土の微粒，炭の粒等はブチャブチャと含む。しまり強く，粘性やや強い。
9層　暗褐色土層　暗褐色土と黒色土が均一に混じり合った土。これも人為的に投げ込まれた土。炭の微粒は多く含んでいるが，焼土はほとんど含まない。しまり強く，粘性やや強い。
10層　暗黄褐色土層　暗褐色土とロームが混じり合った土。ローム微粒やや含む。焼土，炭は含まない。しまり強く，粘性強い。
11層　黄褐色土層　ロームブロックの層。暗褐色土を少しにじむように含む。ひょっとしたら床の掘り寸差か。焼土・炭なし。しまり強く，粘性やや強い。
12層　黄色土層　ロームと少量の暗褐色土が混じり合った土。壁崩壊層。色調は黄色が強い。しまり強く，粘性やや強い。
13層　暗褐色土層　自然堆積層。暗褐色土と少量のロームそして少量の黒色土が混じり合った土。ローム微粒を多く含む。炭，焼土は含まない。しまり強く，粘性強い。
14層　暗褐色土層　人為的に投げ込まれた土層。暗褐色土が主体で，黒色土を少しにじむように混じり合った土層。ローム微粒を少し含む。炭の微粒は少し，焼土はない。しまり強く，粘性強い。
15層　黒褐色土層　黒色土と暗褐色土が均一に混じり合った土。人為的に投げ込まれたもの。ローム微粒を少し含む。焼土，炭はない。しまり強く，粘性強い。
16層　暗褐色土層　暗褐色土が主体で，ローム微粒を少し含む。ロームをにじむように少し含む。炭の微粒は含まれるが焼土の微粒は含まない。しまり強く，粘性強い。
17層　黄色土層　ロームの塊まり。堆積しているのが自然のままのか土なのかは不明。自然の土，地山の土である。しまり強く，粘性強い。
18層　黒褐色土層　黒色土と暗褐色土とが均一に混じり合った土。これも人為的に投げ込まれたもの。ローム微粒を少し含む。焼土，炭はない。しまり強く，粘性強い。
19層　黒褐色土層　18層と同じ。黒褐色土と暗褐色土が混じる。若干黒色土の量が多く，色調がほくろり分層する。ローム微粒少し含むが，焼土，炭等は含まない。しまり強く，粘性強い。

第25図　3号住居跡

は火床部両側に残存し，壁面から 40cmから 50cmほどの長さであった。カマド内部には天井部の崩落土などの白色粘土が多量に埋没していた。また，火床直上には焼土層が厚く堆積していた。

主柱穴は確認されていない。そのほかのピットでは，カマドの反対側の床面中央に小ピットが２ヶ所ほど検出されている。40cm × 30cmの径で約 15cmの深さであり，出入口のためのピットの可能性がある。ほかに，同規模のピットが数ヶ所検出されているが，用途は不明であった。

周溝は南東隅部分で検出されていないが，幅 20cm前後，深さ約 10cmで検出された。



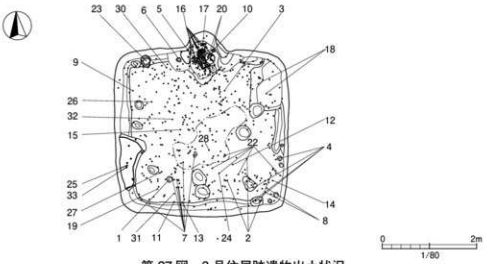
1層　灰色土層　　天井崩壊部.白色粘土ブロック。しまり特に強く，粘性強い。
2層　暗褐色土層　　暗褐色土と白色粘土がまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
3層　暗灰褐色土層　　暗褐色土と白色粘土が均一にまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
4層　暗灰褐色土層　　暗褐色土と白色粘土が均一にまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
5層　暗灰褐色土層　　白色粘土と少量の暗褐色土が均一にまじりあった土。天井崩壊部。しまり強い，粘性強い。
6層　暗灰褐色土層　　白色粘土と暗褐色土が均一にまじりあった土。天井崩壊部。しまり強い，粘性強い。
7層　暗灰褐色土層　　白色粘土と暗褐色土が少しゴチャゴチャにまじりあった土。天井崩壊部。しまり強い，粘性特に強い。

8層　黒褐色土層　　黒褐色土主体でごく少量白色粘土をにじむように含む土。しまり強い，粘性特に強い。
9層　暗灰褐色土層　　白色粘土と少量の暗褐色土がまじりあった土。そで崩壊部。しまり強い，粘性強い。
10層　暗赤褐色土層　　暗褐色土と白色粘土と焼土が少しゴチャゴチャにまじりあった土。しまり強い，粘性特に強い。
11層　暗赤褐色土層　　暗褐色土と焼土がまじりあった土。炭粒を少し含む。しまり強い，粘性特に強い。
12層　赤色土層　　焼土ブロック。しまり特に強い
13層　暗赤灰褐色土層　　にごった焼土が主体となる層。暗褐色土を含むため，ゴチャゴチャとした感じである。天井崩壊層。火床ではない。しまり強い，粘性強い。
14層　赤灰褐色土層　　赤灰褐色の焼土が主体。ぜんぜんにごらなくごちゃごちゃしていない。天井崩壊層。火床ではない。しまり強い，粘性強い。
15層　暗灰褐色土層　　暗褐色土（かなり黒っぽい土）と少量の白色粘土がまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
16層　暗灰褐色土層　　暗褐色土中に少量の白色粘土が斑状にてまじる土。しまり強い，粘性強い。
17層　暗褐色土層　　暗褐色土主体。にごった白色粘土を少し含む。しまり強い，粘性強い。
18層　灰赤色土層　　白色粘土と焼土がまじりあった土。そで崩壊層。しまり強い，粘性強い。
19層　暗褐色土層　　暗褐色土主体。炭粒を多く含む。焼土微粒はごくわずかに含むだけ。消火壁と考えられる。しまり強い，粘性特に強い。
20層　暗褐色土層　　暗褐色土主体。焼土微粒を少し含む。炭粒はほとんど含まない。消火壁と考えられる。しまり強い，粘性特に強い。
21層　暗褐色土層　　暗褐色土主体。きもちロームをにじむように含む。焼土，炭いっさいなし。しまり強い，粘性強い。
22層　暗褐色土層　　暗褐色土と少量の白色粘土がまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
23層　黒褐色土層　　黒色土と暗褐色土がまじりあった土。ほとんど白色粘土は含まない。しまり強い，粘性強い。
24層　黒灰赤褐色土層　　黒色土中に少量の焼土と少量の白色粘土が含まれる土。しまり強い，粘性特に強い。
25層　黒灰褐色土層　　黒色土とにごった白色粘土が少量まじりあった土。しまり強い，粘性強い。
26層　暗赤褐色土層　　暗褐色土と焼土が均一にまじりあった土。白色粘土もごく少量含む。袖または天井崩壊層。しまり強い，粘性特に強い。
27層　暗黄灰褐色土層　　ロームと白色粘土がまじりあった土。そで崩壊層。しまり強い，粘性強い。
28層　暗褐色土層　　暗褐色土主体。白色粘土がごくわずかににじむように含む。しまり強い，粘性強い。
29層　黒灰褐色土層　　黒色土と少量の白色粘土がまじりあった土。しまり強い，粘性強い。
30層　暗赤褐色土層　　暗褐色土とごく少量の焼土が均一にまじりあった土。天井崩壊層。しまり強い，粘性特に強い。
31層　黒褐色土層　　黒色土と暗褐色土がまじりあった土。白色粘土にはほとんど含まない。しまり強い，粘性強い。
32層　黒灰褐色土層　　黒色土とにごった白色粘土がまじりあった土。天井崩壊層。しまり強い，粘性強い。
33層　暗褐色土層　　暗褐色土中に焼土を少しにじむように含む土。しまり強い，粘性強い。
34層　暗黄褐色土層　　ロームと暗褐色土がまじりあった土。しまり強い，粘性強い。

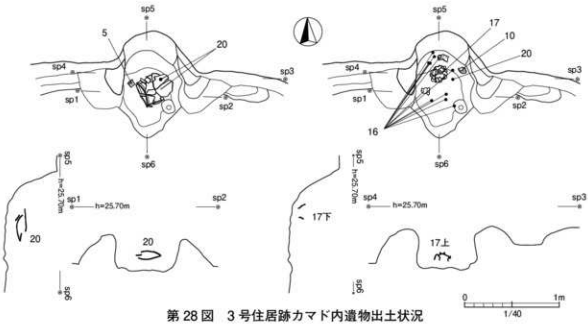
第 26 図　３号住居跡カマド

床硬化面は住居の中央で1m 80cm×1mほどの不規則な範囲で検出された。

テラス状に形成された段差が，住居跡の南西隅付近の壁際で検出された。幅1m 20cm，奥行き最大で50cmほどの範囲で，床面からの高さ20cmほどでテラス状に踏み固められていた。

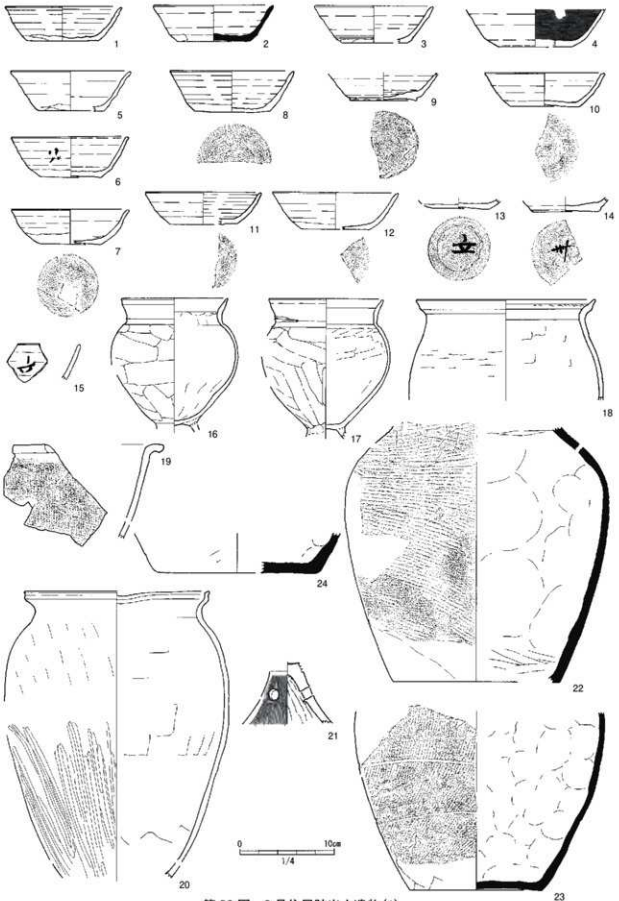


第27図　3号住居跡遺物出土状況



第28図　3号住居跡カマド内遺物出土状況

第29図　3号住居跡焼土・炭化材・粘土検出状況



第30図　3号住居跡出土遺物(1)

第７表　３号住居跡出土遺物観察表(1)

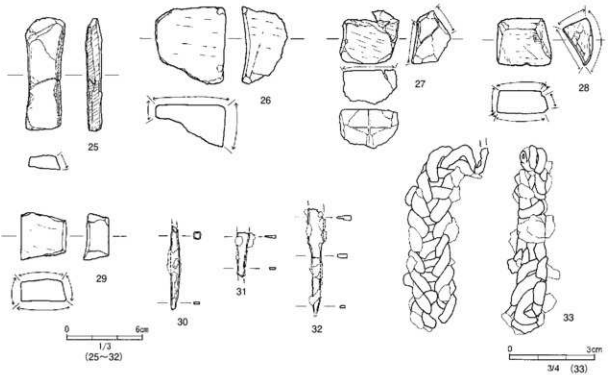
［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
1	土師器 坏	口径　(12.3) 底径　7.6 高さ　3.6	60%程度	ロクロ成形　切離し後底面手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ 内外面とも に黒変有り	外面　にぶい橙　5YR6/4 内面　にぶい橙　5YR6/3	石英・長石　細砂粒 多 焼成　良好	整理　3D-01 取上　51
2	須恵器 坏	口径　[12.8] 底径　(7.6) 高さ　3.9	40%程度	ロクロ成形　切離し後底面手持ちヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　灰　5Y5/1 内面　灰　5Y5/1	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-05 取上　86,91,190
3	土師器 坏	口径　(12.6) 底径　(6.8) 高さ　3.9	20%程度	ロクロ成形　切離し後底面手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ　内外黒変化	外面　暗灰　N3/0 内面　暗灰　N3/0	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-08 取上　294
4	土師器 坏	口径　— 底径　(7.7) 高さ　[4.0]	40%程度	ロクロ成形　切離し後底面全面回転ヘラケズリ 内面ミガキ後、黒色処理	外面　灰黄褐 10YR6/2　黒変多い 内面　黒　N1.5/0	石英・長石　細砂粒　少 金雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　3D-07 取上　89,197,265 ,288
5	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　(7.0) 高さ　4.2	20%程度	ロクロ成形　切離し後底面手持ちヘラケズリ 体部下端手持ちヘラケズリ	外面　明赤褐 2.5YR5/6 内面　赤褐　2.5YR4/8	石英・長石 細砂粒～小砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-12 取上　497, 498
6	土師器 坏	口径　12.5 底径　6.5 高さ　4.3	100%	ロクロ成形　回転糸切り後　底面回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ 体部外面に墨書がみられるが、判読不能	外面　浅黄橙 10YR8/4　赤変もあり 内面　浅黄橙 10YR8/4	石英・長石 細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　3D-02 取上　442
7	土師器 坏	口径　12.6 底径　6.6 高さ　3.7	90%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ 底面に線刻「ノ」か	外面　にぶい橙　7.5YR7/3　赤変・黒変あり 内面　浅黄橙 7.5YR8/3　赤変・黒変あり	石英・長石 細砂粒　まばら 雲母細片　少 焼成　良好	整理　3D-03 取上　387,391,393 ,416,417,418,422一括
8	土師器 坏	口径　(13.2) 底径　(8.0) 高さ　4.4	50%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　にぶい黄橙　10YR6/3 内面　にぶい黄橙　10YR7/2 内外面に鮫床 10YR4/1 がまだらまじる	石英・長石 細砂粒　やや多 金雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　3D-06 取上　263
9	土師器 坏	口径　— 底径　(7.0) 高さ　[2.9]	30%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面そのままにしてあり、高台状に切離し面が残る 体部下端の成形は見られない	外面　灰褐　7.5YR5/2 内面　にぶい褐　7.5YR5/4	石英・長石 細砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-04 取上　8
10	土師器 坏	口径　(12.8) 底径　(7.5) 高さ　3.6	30%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　浅黄橙 10YR8/4 内面　浅黄橙 10YR8/4	石英・長石 細砂粒　やや多 黒雲母　少 金雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　3D-10 取上　554
11	土師器 坏	口径　(12.4) 底径　(7.1) 高さ　3.4	30%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　浅黄橙 7.5YR8/6 内面　浅黄橙 10YR8/4	石英・長石 細砂粒　やや多 雲母細片　少 焼成　良好	整理　3D-09 取上　362
12	土師器 坏	口径　(13.4) 底径　(7.2) 高さ　3.9	20%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　にぶい橙　7.5YR7/4 内面　橙　7.5YR7/6	石英・長石　細砂粒　多 金雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　3D-11 取上　85,90
13	土師器 坏	口径　— 底径　6.6 高さ　[1.0]	30%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ 底面に「立」の墨書	外面　橙　5YR7/6 内面　にぶい橙　5YR7/4	石英・長石 細砂粒　まばら 焼成　良好	整理　3D-13 取上　361
14	土師器 坏	口径　— 底径　(7.0) 高さ　[1.5]	20%程度	ロクロ成形 回転糸切り後　底面外周を回転ヘラケズリ 体部下端にヘラケズリはみられず、ロクロ成形のまま　底面に墨書「聖」か、不明	外面　橙　5YR7/6 内面　淡橙　5YR8/4	石英・長石 細砂粒　まばら 焼成　良好	整理　3D-14 取上　92
15	土師器 坏	口径　— 底径　— 高さ　—	10%程度	ロクロ成形 体部外面に墨書「立」の上半部分か、不明	外面　淡橙　5YR8/3 内面　灰褐　5YR6/2	石英・長石 微細砂粒　まばら 焼成　良好	整理　3D-15 取上　302
16	土師器 小型 台付甕	口径　(11.2) 底径　— 高さ　[13.8]	60%程度	口縁内外横ナデ　胴部外面ヘラケズリにより、器厚を薄く仕上げる　内面ヘラナデ 頸部外面は円形工具によるヘラナデ	外面　赤橙　10R6/6 内面　にぶい赤橙　10R6/4	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-21 取上　476,485,494 ,512,513,516,518, 533,537,540,541
17	土師器 小型 台付甕	口径　12.1 底径　— 高さ　[14.7]	80%程度	口縁内外横ナデ　胴部外面ヘラケズリにより、器厚を薄く仕上げる　内面ヘラナデ 頸部は円形工具によるヘラナデ	外面　橙　2.5YR7/8 内面　橙　2.5YR7/8	石英・長石 小砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-22 取上　355
18	土師器 甕	口径　(19.0) 底径　— 高さ　[10.1]	10%以下	口縁内外横ナデ　胴部外面ヘラナデ　内面ヘラナデ 口縁の立ち上がりせた指頭による成形痕が内側に残る 頸部に煮こぼれの痕跡	外面　浅黄橙　10YR8/4 内面　黄橙　10YR8/6	石英・長石 小砂粒　多 金雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　3D-16 取上　119,125
19	土師器 甕又甑	口径　— 底径　— 高さ　—	10%以下	胴部外面タタキ　内面指頭成形後ナデ 頸部外面横ナデ 口縁部外面ナデ,内面横ナデ	外面　暗灰　N3/0 内面　暗灰　N3/0	石英・長石 細砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-19 取上　62, F7グリッド
20	土師器 甕	口径　196 底径　— 高さ　[30.2]	70%程度	口縁から頸部の内外面を横ナデ　胴部外面の上位に縦位のヘラナデを残し、中位から下半にかけて縦位のミガキを粗くかける　内面ヘラナデを残す	外面　橙　7.5YR6/6 内面　橙　7.5YR7/6	石英・長石 大～小砂粒　多 焼成　良好	整理　3D-24 取上　536

北東隅には床面より一段低く掘りくぼめた部分が検出されている。約1 m 10cm× 70cmの範囲で深さは10cmほどであった。

遺物出土状況

本住居跡から出土した遺物の総数は1,147点で，ナンバーを付して取り上げた遺物は733点であった。そのうち土師器は648点あり88.4%に達する。そのほかに，須恵器19点，石器9点4個体，礫5点，鉄器片6点4個体，鉄滓43点，粘土塊2点，不明2点であった。また，一括で取り上げた遺物は414点あり，そのうち土師器が259点62.5%を占め，比率はやや低い。須恵器10点，石器1点，礫17点，鉄器片2点，鉄滓82点，炭化物11点，不明32点が出土した。



第31図　3号住居跡出土遺物(2)

第8表　3号住居跡出土遺物観察表(2)

［　］は現存または計測できた計測値・(　)は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
21	土師器 高坏	口径　— 底径　— 高さ　[6.4]	40%程度	脚部中位に三対の焼成前の穿孔 脚外面ミガキ後，赤彩　内面ナデ 坏部の底面に赤彩	外面　赤　10R4/6 内面　にぶい橙　7.5YR7/4	石英・長石 雲母細片 多 焼成　良好	整理　3D-20 取上　一括
22	須恵器 甕又瓶	口径　— 底径　(17.6) 高さ　[27.0]	30%程度	胴部外面をタタキ，後下半を斜位のヘラケズリ整形 内面にはタタキの押え痕が残り，肩頂のナデ　頸部の内面ヘラナデにより消らかに整形	外面　黄灰　2.5Y4/1 内面　灰　7.5Y4/1	石英・長石 小～細砂粒　多 雲母細片　少 焼成　良好	整理　3D-18 取上 181,182,186, 206,269
23	須恵器 甕	口径　— 底径　14.0 高さ　18.8	40%程度	胴部外面は下端にヘラケズリを残し，中位から上半をタタキ　内面押え痕が残る 胴部外面の中位と下位に竹管状の工具により凹線の筋帯を2本廻らす 内面に炭化物付着	外面　灰　10Y6/1 内面　淡黄　2.5Y8/4	石英・長石 小砂粒　多 焼成　やや不良か	整理　3D-23 取上　235
24	須恵器 甕	口径　— 底径　(17.6) 高さ　[4.2]	10%以下	胴部下端外面ヘラケズリ　内面押え痕	外面　黄灰　2.5Y4/1 内面　灰白　2.5Y7/1	石英・長石 砂粒　多 雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　3D-17 取上　181

カマド内からの出土遺物は坏(5)，坏(10)，小型台付甕(16)，小型台付甕(17)，甕(20)であった。小型台付甕(17)は火床部の奥，煙道直下に倒立して出土している（第28図右）。同図中の断面図における17下は胴部上半で17上は胴部下半の出土状況を表す。甕(20)は火床部のほぼ中央から，横倒しの状態で出土しているのが確認された。小型台付甕(16)は火床部内に散乱して出土した。

坏(6)はカマドの西側の袖上に完形で出土した。須恵器甕(23)は胴下半部が北西隅付近の壁際から出土している。坏(9)も北西隅側の壁近くから出土した。坏(15)は住居跡中央付近からの出土である。坏(3)はカマド前面近くから出土した。坏(1)，坏(2)，坏(4)，坏(7)，坏(8)，甕(19)，須恵器甕底部(24)などは南壁側の一帯で出土している。

テラス状遺構から砥石(25)，編み上げて鎖状にした鉄器(33)などが出土している。砥石(26)は西壁側，砥石(27)は南西隅側，砥石(28)は住居跡中央付近で出土した。刀子(31)は南壁側，刀子(32)は住居跡中央付近から出土していた。

焼土は住居跡中央付近でブロック状の塊が検出されたが，他には検出されていない。しかし，炭化材は形状の比較的明瞭なものが，住居跡の中央から放射状に出土していた。

第９表　３号住居跡出土遺物観察表(3)　　［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)・重量(g)				特　徴	材質	備　考 (整理No・取上No.)
25	石器 砥石	長さ 厚さ	8.9 1.1	最大幅 重量	3.2 42.5	側面に擦痕面がみられる 同一地点で４つに破損していたものを接合	粘板岩　claystone	整理　3D-101 取上　419
26	石器 砥石	長さ 厚さ	[6.1] [3.3]	最大幅 重量	5.5 113.6	残存する３面に砥石としての使用痕がみられる	凝灰岩　tuff	整理　3D-104 取上　31
27	石器 砥石	長さ 厚さ	[4.2] [2.2]	最大幅 重量	[4.0] 53.1	並行ではないが，上下２面に砥石としての使用面がみられる 手前正面に十字の擦痕による刻みがみられる　分割のために付けられたのか　３点の接合	凝灰岩　tuff	整理　3D-105 取上　54
28	石器 砥石	長さ 厚さ	3.8 2.3	最大幅 重量	4.3 38.4	５面すべてに砥石としての使用痕がみられる	凝灰岩　tuff	整理　3D-102 取上　77
29	石器 砥石	長さ 厚さ	[3.7] 2.1	最大幅 重量	3.5 38.5	前後両端が欠損している　全形不明　四周には砥石としての使用痕がみられる	凝灰岩　tuff	整理　3D-103 取上　一括
30	鉄器 刀子か	長さ 厚さ	[6.6] 0.2～0.6	最大幅 重量	(0.7) 5.5	中央付近付着物　一端の断面は空洞の方形	鉄	整理　3D-106 取上　142
31	鉄器 刀子	長さ 厚さ	[3.5] 0.2～0.25	最大幅 重量	(0.9) 2.5	柄の部分	鉄	整理　3D-107 取上　259
32	鉄器 刀子	長さ 厚さ	[8.3] 0.2～0.4	最大幅 重量	1.3 8.2	柄の部分	鉄	整理　3D-108 取上　332
33	鉄器 鎖	長さ 厚さ	[6.6] (1.0)	最大幅 重量	[1.5] 21.0	径4mmの針金状を輪にしたものを折り曲げ，交互に組み上げて，鎖状にする　一端は引きちぎれたように破損する　兵庫鎖	鉄	整理　3D-109 取上　420

４号住居跡（04D）（第32～36図・図版5・11・12）

位置　Ⅰ5，Ⅰ6グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　3m90cm×3m76cm×54cm

形状　方形　　**主軸方位**　N 0.5°W

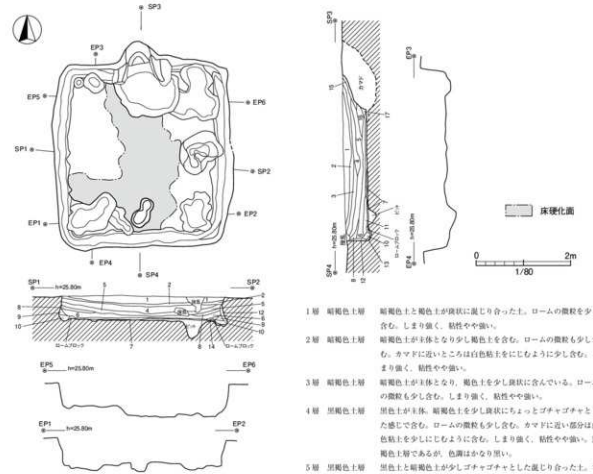
土層　自然埋没

内部構造

カマドは北壁のほぼ中央に付設されていた。カマドの火床部は壁ライン内側に設置され，規模は１m 14cm×１m 30cmの不整形で床面からの深さ約20cm掘り込まれていた。煙道は火床部端から約80cmの幅で，48cmほど斜めに壁面を掘り込んでいた。カマドの袖は火床部にまたがって残存していた。約50cm

の間隔で壁面から 35cmから 55cmほどの長さであった。また，カマド内部には天井部の崩落土などが多量に埋没していた。また，火床上層には厚く焼土層が堆積していた。

主柱穴は検出されていない。そのほかのピットはカマドの反対側の壁側中央に小ピットが２ヶ所ほどつながった状況で検出された。約 25cm× 30cmと約 40cm× 35cmの径で 20cmほどの深さがあり，出入口のためのピットと思われる。同規模のピットはほとんどみられず，径が約 45cm× 35cm深さ約 13cmのピットがカマド西側の北西隅側に，径が約 20cm× 20cmのピットが北西隅に検出されているが，いずれも用途は定かではない。そのほか，この住居跡では不整形のピットあるいは床面の凹みが多く検出されて



1層　暗褐色土層　暗褐色土と褐色土が斑状に混じり合った土。ロームの微粒を少し含む。しまり強く，粘性やや強い。

2層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり少し褐色土を含む。ロームの微粒も少し含む。カマドに近いところは白色粘土をにじむように少し含む。しまり強く，粘性やや強い。

3層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となり，褐色土を少し斑状に含んでいる。ロームの微粒も少し含む。しまり強く，粘性やや強い。

4層　黒褐色土層　黒色土が主体，暗褐色土を少し斑状にちょっとブチャブチャとした感じで含む。ロームの微粒も少し含む。カマドに近い部分は白色粘土を少しにじむように含む。しまり強く，粘性やや強い。黒褐色土層であるが，色調はかなり黒い。

5層　黒褐色土層　黒色土と暗褐色土が少しブチャブチャとした混じり合った土。ロームの微粒も少し含む。カマドに近づくにつれて白色粘土を少しにじむように含む。しまり強く，粘性やや強い。

6層　黒褐色土層　黒色土と暗褐色土が均一に混じり合った土。部分的には黒色が強いところがある。ロームも少しにじむように含む。カマドに近づくにつれ白色粘土を少ししにじむように含む。しかし，その量は上の2,4,5層に比べるとかなり少ない。極少量と言い換えておく。しまり強く，粘性強い。

7層　暗黄褐色土層　床面層。ロームと暗褐色土が混じり合った土。しまり強く，粘性強い。

8層　暗褐色土層　暗褐色土が主体で褐色土をほんの少し含む。しまり強く，粘性強い。

9層　暗褐色土層　暗褐色土が主体でロームはほとんど含まない。しまり強く，粘性強い。

10層　暗褐色土層　暗褐色土が主体となってロームの土がにじむように混じり合った土。しまり強く，粘性強い。

11層　暗褐色土層　暗褐色土が主体で少し黒色土を含んでいる層。ロームも少し含む。しまり強く粘性強い。

12層　暗黄褐色土層　壁崩壊層である。ロームと暗褐色土がブチャブチャとした感じで混じり合った土。

13層　暗黄褐色土層　壁崩壊によって埋まった層。ロームが主体となり，暗褐色土はほとんど含まない。

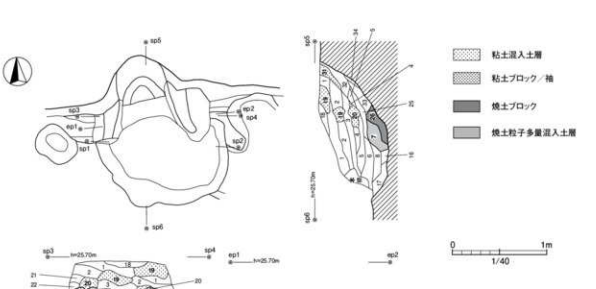
14層　暗褐色土層　暗褐色土とロームが少しブチャブチャとした感じで混じり合った土。ロームの小粒も含む。しまり強く，粘性強い。

15層　黒褐色土層　黒色土が主体，白色粘土をにじむように含む。しまり強く，粘性強い。カマド崩壊による影響をかなり強く受けている。

16層　暗褐色土層　暗褐色土と薄った白色粘土が少しブチャブチャとした感じで混じり合った土。黒色土，焼土微粒少し含む。しまり強く，粘性強い。カマド崩壊による影響層である。

17層　暗褐色土層　暗褐色土と薄った白色粘土が均一に混じり合った土。焼土の微粒も少し含む。しまり強く，粘性強い。カマド崩壊による影響層である。

第 32 図　4 号住居跡



1層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土と黒色土が混じり合った土。やや白色粘土が多い。しまり強く、粘性やや強い。
2層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土が混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
3層　暗灰褐色土層　暗褐色土と少量白色粘土が均一に混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
4層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土が少しゴチャゴチャとした感じで混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
5層　暗灰褐色土層　多量のにごった白色粘土と暗褐色土が均一に混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
6層　黒灰褐色土層　黒色土と少量の白色粘土がゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
7層　暗赤灰褐色土層　焼土と少量の白色粘土と暗褐色土がゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
8層　暗灰色土層　にごった白色粘土が主体で暗褐色土を少しにじむように含む土。しまり強く、粘性やや強い。
9層　黒灰褐色土層　黒色土と少量の白色粘土が混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
10層　暗灰褐色土層　暗褐色土と少量の白色粘土がゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
11層　灰褐色土層　そでの残存部分か？白色粘土と暗褐色土がゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
12層　暗灰褐色土層　白色粘土と少量の暗褐色土がゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
13層　暗黄褐色土層　ロームブロックと暗褐色土がゴチャゴチャに混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
14層　暗褐色土層　暗褐色土主体、極少量白色粘土をにじむように含む土。しまり強く、粘性やや強い。
15層　暗褐色土層　暗褐色土主体、極少量のロームと極少量の白色粘土をにじむように含む土。しまり強く、粘性やや強い。
16層　暗褐色土層　暗褐色土、にごった白色粘土、ロームがゴチャゴチャと混じり、焼土も極少量含む土。しまり強く、粘性やや強い。
17層　暗黄褐色土層　暗褐色土とロームブロック、ロームがゴチャゴチャと混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
18層　暗褐色土層　暗褐色土が主体で白色粘土を少し含む。しまり強く、粘性やや強い。
19層　暗灰褐色土層　白色粘土と暗褐色土がゴチャゴチャと混じり合った土。天井崩壊層。しまり強く、粘性やや強い。
20層　灰褐色土層　白色粘土主体、暗褐色土を極少量含む。天井崩落部分。しまり強く、粘性やや強い。
21層　暗灰褐色土層　暗褐色土主体で少量の白色粘土が混じり合った土。しまり強く、粘性やや強い。
22層　暗黄褐色土層　ローム主体の土。壁際部の層。しまり強く、粘性やや強い。
23層　暗赤褐色土層　暗褐色土が主体であるが、にごった焼土、にごった白色粘土を含む土。はっきりとした焼土層ではない。しまりやや強く、粘性やや強い。
24層　赤灰色土層　白色粘土が焼土化したものが主体。天井内側部分である。しまり強い、粘性やや強い。
25層　暗褐色土層　暗褐色土主体であるが、にごった焼土と白色粘土を少し含む土。しまりやや強い、粘性やや強い。
26層　赤褐色土層　焼土層である。しまりやや強い、粘性やや強い。
27層　暗黄褐色土層　ロームブロック多量と暗褐色土少量が混じり合った土。しまり強い、粘性やや強い。
28層　黒灰褐色土層　黒色土と白色粘土が均一に混じり合った土。しまり強い、粘性やや強い。
29層　暗灰褐色土層　暗褐色土と白色粘土が均一に混じり合った土。しまり強い、粘性やや強い。
30層　暗灰褐色土層　白色粘土と少量の暗褐色土が混じり合った土。しまり強い、粘性やや強い。
31層　灰褐色土層　白色粘土が主体で暗褐色土を少し含む。天井崩落部。しまり強い、粘性やや強い。
32層　暗褐色土層　暗褐色土と少量のにごった白色粘土が混じり合い、焼土が少しまじる。天井内側部分のブロックまじる。しまり強い、粘性やや強い。
33層　暗灰褐色土層　暗褐色土とにごった白色粘土が均一に混じり合った土。焼土を極少量含む。しまりやや強い、粘性やや弱い。
34層　暗黄褐色土層　ロームと白色粘土が混じり合った土。しまり強い、粘性やや強い。

第33図　4号住居跡カマド

いる。北東隅の凹みは深さが約24cmあり，南西隅のものは深さが約26cm，南東隅では深さが約18cm，東壁中央にもくぼみが検出された。

周溝は北西隅で一部検出されなかったが，幅25cm～35cm，深さが約10cmあり,ほぼ全周していた。

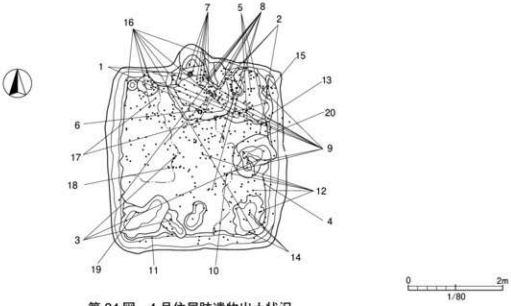
床硬化面はカマドから出入口ピットと想定されるピットの際まで直線的に伸び，南西隅側にも一部が広がる。

遺物出土状況

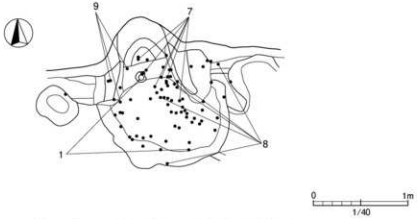
本住居跡から出土した遺物の総数は936点で，ナンバーを付して取り上げた遺物は524点であった。そのうち土師器は433点あり82.6％に達する。そのほかに，須恵器58点，礫4点，鉄滓3点，鉄滓20点，土製品(支脚)2点，不明4点であった。また，一括で取り上げた遺物は412点あり，そのうち土師器が261点63.3％を占め，比率はやや低い。須恵器20点，礫23点，鉄滓100点，不明7点，カワラ1点が出土した。

住居跡の全般的な出土傾向はカマド周辺に多くの遺物が集中し，その他にはやや希薄な感がある。

カマド内から出土した遺物は坏(1)，甕(7)，甕(7)と同一個体の可能性のある甕(8)の一部，甕胴下半(9)の一部などであった。甕(8)と甕(9)の他の破片は住居内部に広範囲に出土していた。坏(2)，甕底部(5)，

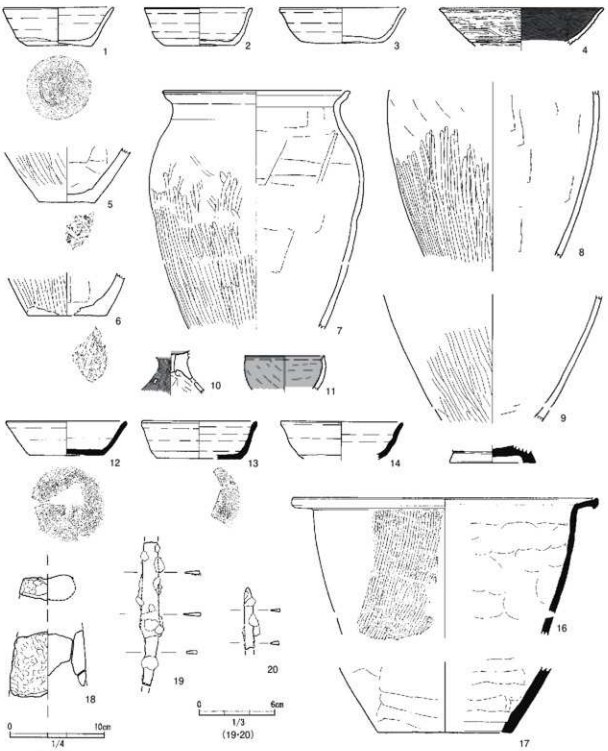


第34図　4号住居跡遺物出土状況



第35図　4号住居跡カマド内遺物出土状況

甕底部(6)，須恵器坏(13)，須恵器高台(15)，須恵器甕(16)などはカマド周辺から出土した。坏(3)，坏(4)，須恵器坏(12)，須恵器坏(14)は南壁側に分散して出土した。支脚(18)はカマドから離れ住居跡の中央付近で出土していた。また，鉄製品の刀子(19)は南西隅の凹み内で，刀子(20)は東壁中央の凹みから出土した。



第36図　4号住居跡出土遺物

第10表　4号住居跡出土遺物観察表(1)

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考(整理No.・取上No.)
1	土師器 坏	口径　11.8 底径　6.9 高さ　4.1	90%程度	ロクロ成形 回転糸切り後，底面外周回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　赤　10R5/8 内面　赤橙　10R6/8	石英・長石　細砂粒 雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　4D-01 取上　372，490
2	土師器 坏	口径　(11.4) 底径　7.5 高さ　4.0	60%程度	ロクロ成形　切離し後，底面全面回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ 内外ともに黒変有り	外面　にぶい橙　7.5YR7/4 内面　にぶい橙　7.5YR7/3	石英・長石 小砂粒　少 雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　4D-02 取上　110,315,357
3	土師器 坏	口径　(13.4) 底径　(9.0) 高さ　3.7	30%程度	ロクロ成形　底面は回転糸切りのまま 体部下端もヘラケズリない	外面　にぶい橙　5YR7/3 内面　浅黄橙　7.5YR8/3	石英・長石 細砂粒 雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　4D-03 取上　309,417
4	土師器 坏	口径　(17.4) 底径　— 高さ　[3.9]	20%程度	外面まばらなミガキ　黒変多い 内面ミガキ後，黒色処理	外面　淡黄　2.5Y8/4 内面　黒　N1.5/0	石英・長石 細砂粒 金雲母微片　まばら 焼成　良好	整理　4D-04 取上　91
5	土師器 甕	口径　— 底径　(6.0) 高さ　[5.8]	10%以下	外面ヘラナデ　底面木葉痕 内面ヘラナデ	外面　赤　10R5/8 内面　浅黄　2.5Y7/3	石英・長石 大砂粒　多 雲母細片　まばら 焼成　良好	整理　4D-15 取上　159,253,255
6	土師器 甕	口径　— 底径　(8.4) 高さ　[4.5]	10%以下	外面ヘラナデ　底面に台の圧痕が残る 内面ヘラナデ	外面　にぶい黄褐　10YR6/3 内面　にぶい黄橙　10YR7/2	石英・長石 大砂粒　多 雲母細片　多 焼成　良好	整理　4D-16 取上　401
7	土師器 甕	口径　(20.0) 底径　— 高さ　[18.0～25.0]	40%程度	口縁内外横ナデ 胴部外面下半にミガキ　内面ヘラケズリ	外面　にぶい黄橙　10YR7/3 内面　にぶい黄橙　10YR7/3	石英・長石 小砂粒　多 雲母細片　多 焼成　良好	整理　4D-13 取上　479,487,491，498,501,503
8	土師器 甕	口径　— 底径　— 高さ　[18.3]	20%程度	胴部外面ヘラナデ後，下半にミガキ 内面ヘラケズリ	外面　にぶい橙　7.5YR7/4 内面　褐灰　7.5YR5/1	石英・長石 小砂粒　多 雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　4D-14 取上　48,77,124，151,370,375,474，475,496
9	土師器 甕	口径　— 底径　— 高さ　[13.0]	20%程度	外面ナデ 内面ナデ	外面　にぶい橙　7.5YR7/4 内面　浅黄橙　7.5YR8/4	石英・長石 砂粒　多 金雲母片　少 焼成　良好	整理　4D-12 取上　3,82,160,169，269,324,466,485
10	土師器 器台	口径　— 底径　— 高さ　[4.5]	30%程度	脚部外面はミガキ後，赤彩　器受部底赤彩	外面　赤　10R4/8 脚内面　暗赤灰　10R3/1	石英・長石 細砂粒 やや多 焼成　良好	整理　4D-11 取上　192
11	土師器 塊	口径　(8.4) 底径　— 高さ　[3.6]	20%程度	内外ナデ，内外ともに赤彩	外面　赤　7.5R4/6 内面　赤　7.5R4/6	石英・長石 細砂粒　多 焼成　良好	整理　4D-17 取上　190
12	須恵器 坏	口径　(12.8) 底径　(7.8) 高さ　3.6	60%程度	ロクロ成形 底部中央の凹みはへらおこしの痕か	外面　灰　7.5Y4/1 内面　灰　5Y4/1	石英・長石 小砂粒　多 焼成　良好 やや焼きムラが多い	整理　4D-05 取上　87,93,98，193,266,一括
13	須恵器 坏	口径　(12.2) 底径　(9.0) 高さ　4.0	30%程度	ロクロ成形 底面ヘラケズリ，体部下端ヘラケズリ 底面に線刻がみられる	外面　灰白　7.5Y7/2 内面　灰白　7.5YR8/1	石英・長石 細砂粒　多 雲母細片 焼成　良好	整理　4D-07 取上　168,一括
14	須恵器 坏	口径　(13.0) 底径　— 高さ　[3.9]	20%程度	ロクロ成形 体部下端に回転ヘラケズリ	外面　灰～灰白　N5/0～5Y8/2 内面　灰～灰白　N6/0～10Y7/1	石英・長石 細砂粒　多 焼成　良好	整理　4D-06 取上　96,97,103
15	須恵器 高台部	口径　— 底径　(9.2) 高さ　[1.8]	10%以下	ロクロ成形 器の底面に自然釉がかかる　高台部外面にも部分的にわずかに自然釉がみられる	外面　灰　5Y6/1 内面　暗オリーブ　7.5Y4/3	石英・長石 細砂粒・砂粒　多 焼成　良好	整理　4D-08 取上　162
16	須恵器 甕/瓶	口径　(32.4) 底径　— 高さ　[14.5]	20%程度	胴部上端で高横に屈曲し，長く伸びて口縁を成す 胴部外面をタタキ，内面には当て具の押え痕が多数残る　口縁から胴部上端まで横ナデ	外面　灰　10Y4/1 内面　灰　10Y6/1	石英・長石 小砂粒　多 焼成　良好	整理　4D-10 取上　2,11,17,146，221,277,278,469
17	須恵器 瓶	口径　— 底径　— (14.0～15.0) 高さ　[6.9]	10%以下	底面を焼成前に切り取り，穿孔している 外面ヘラケズリ　内面ヘラナデ	外面　灰白　5Y7/2 内面　灰　5Y6/1	石英・長石 細砂粒　多 石英の砂粒　まばら 雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　4D-09 取上　167,175
18	土製品 支脚	高さ　2.7 最大径　5.4 高さ　7.1 最大径　8.1	—	円筒状の支脚の上端部 同下半部	外面　にぶい黒　7.5YR5/4 断面　赤　10R5/8	焼成　不良	整理　4D-18 取上　410

第11表　4号住居跡出土遺物観察表(2)

［　］は現存または計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)・重量(g)	特　徴	材質	備考(整理No.・取上No.)
19	鉄器 刀子	長さ　[11.3]　最大幅　(1.5) 厚さ　0.2～0.3　重量　13.3	柄の部分と刀身が残存する	鉄	整理　4D-101 取上　188
20	鉄器 刀子	長さ　[4.9]　最大幅　0.8 厚さ　0.2～0.3　重量　3.1	刀身の部分	鉄	整理　4D-102 取上　257

第３節　土坑

調査区域内では土坑が３基検出されている。

１号土坑（01P）（第 38 図・図版７）

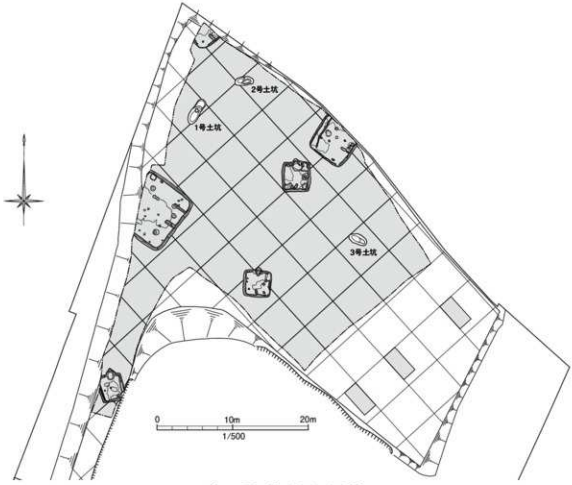
位置　Ｈ２グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　2m62cm×1m28cm×45cm
形状　長楕円形　　**主軸方位**　Ｎ 29゜Ｅ
土層　自然埋没　　**遺物出土状況**　出土遺物なし
内部構造　ほぼ中央に 55cm× 45cm深さ 20cmの小ピットが見られる。北側に 30cmほどの段差が見られ，深さ 15cmほどの土坑が重複している可能性もある。

２号土坑（02P）（第 38 図・図版７）

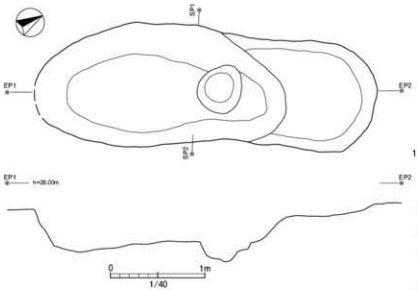
位置　Ｊ３グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　2m42cm×1m14cm×49cm
形状　長楕円形　　**主軸方位**　Ｗ１゜Ｓ
土層　自然埋没　　**遺物出土状況**　出土遺物なし
内部構造　東側に 10cmほどの浅い段差が見られ，二つの土坑の重複の可能性もある。

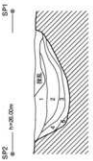
３号土坑（03P）（第 38 図・図版７）

位置　Ｉ８グリッド　　**規模**　（長）×（幅）×（深さ）　2m52cm×1m29cm×50cm
形状　長楕円形　　**主軸方位**　Ｎ 65゜Ｗ
土層　自然埋没　　**遺物出土状況**　出土遺物なし
内部構造　底面に段差はみられるが，深い皿状の土坑。



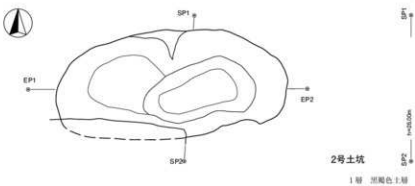
第 37 図　検出された土坑





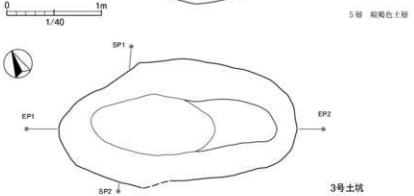
1号土坑

1層	黒褐色土層	黒色土中に少量の暗褐色土が少し斑状にまじりあった土。しまり強く、粘性普通。
2層	黒色土層	黒色土主体。暗褐色土を少し含む。しまり強く、粘性やや強い。
3層	黒褐色土層	黒色土にごったロームがまじりあった土。しまり強く、粘性やや強い。
4層	暗黄褐色土層	ロームが主体となり、暗褐色土を少しにじむように含む。しまり強く、粘性強い。
5層	ローム自然層	



2号土坑

1層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土と少量のロームがまじりあった土。しまり強く、粘性やや強い。
2層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土がゴチャゴチャとまじりあった土。部分的にロームが多く含まれる土。しまり強く、粘性やや強い。
3層	暗褐色土層	暗褐色土と黒色土とロームがゴチャゴチャとまじりあった土。しまり強く、粘性やや強い。
4層	暗黄褐色土層	ロームが主体となり暗褐色土を少しにじむように含む土。しまり強く、粘性やや強い。
5層	暗褐色土層	暗褐色土とロームがゴチャゴチャにまじりあった土。しまり強く、粘性やや強い。



3号土坑

1層	黒褐色土層	黒褐色土が主体となる土。しまり強く、粘性強い。
2層	黒褐色土層	黒色土と暗褐色土がやし斑状に混じり合った土。しまり強く、粘性強い。
3層	暗褐色土層	暗褐色土と少量のロームが均一にまじりあった土。しまり強く、粘性強い。
4層	黒黄褐色土層	黒色土とロームがまじりあった土。しまり強く、粘性強い。
5層	暗褐色土層	暗褐色土とロームが均一にまじりあった土。しまり強く、粘性特に強い。
6層	暗黄褐色土層	ローム主体で暗褐色土を少しにじむように含む。しまり強く、粘性特に強い。

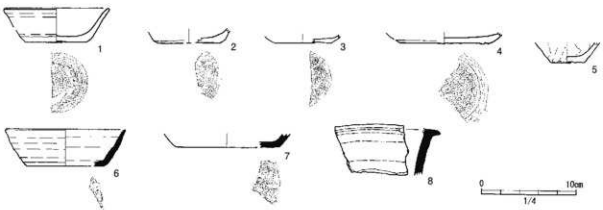
第38図　1号・2号・3号土坑

第4節　グリッド出土遺物（第39図・図版12）

遺構以外で出土した遺物は176点確認できた。その内土師器は157点で89.2%を占めている。そのほかに須恵器11点，礫3点，鉄滓4点，不明2点が出土している。

出土遺物の中に，縄文土器や弥生土器の可能性のあるものは確認できなかった。

グリッド別に見ると，F７グリッドで29点，Ｊ5，Ｊ９グリッド12点，それ以外は１点から６点ほどでほとんどの区域で遺物の出土は希薄であった。F７グリッドで出土量が多いのは３号住居跡との関連と思われる。



第39図　グリッド出土遺物

第12表　グリッド出土遺物観察表

［　］は現存または計測できた計測値・（　）は復元推定値

No.	器種	計測値(cm)	遺存度	成形・整形・特徴	色調	胎土・焼成	備考（整理No.・取上No.）
1	土師器 坏	口径　(11.2) 底径　(6.4) 高さ　3.6	40%程度	ロクロ成形 回転糸切り後，底面外周回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　浅黄橙 10YR8/4 内面　浅黄橙 10YR8/4	石英・長石　細砂粒　やや多 焼成　良好	整理　G-1 取上　F-7グリッド
2	土師器 坏	口径　— 底径　(6.4) 高さ　[1.5]	10%程度	ロクロ成形 回転糸切り後，底面外周回転ヘラケズリ 体部下端回転ヘラケズリ	外面　淡赤橙 2.5YR7/3 内面　にぶい橙 2.5YR6/3	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　G-3 取上　J-5グリッド
3	土師器 坏	口径　— 底径　(6.2) 高さ　[0.9]	20%程度	ロクロ成形 底面は回転糸切り後，外周を回転ヘラケズリ 体部下端も回転ヘラケズリ 内外面に黒斑多い	外面　にぶい橙 7.5YR7/3 内面　灰黄　2.5Y6/2	長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　G-4 取上　表採
4	土師器 坏又は 高台坏	口径　— 底径　(9.4) 高さ　[1.1]	20%程度	ロクロ整形 底面外周に高台の痕跡らしきもの残る 底面回転ヘラケズリ	外面　橙　2.5YR6/8 内面　浅黄橙 10YR8/3	石英・長石　細砂粒　多 焼成　良好	整理　G-2 取上　表採
5	土師器 甕	口径　— 底径　(3.6) 高さ　[2.1]	10%以下	外面ヘラケズリ 内面ヘラナデ	外面　明赤褐　5YR5/6 内面　にぶい橙 5YR6/4	石英・長石　細砂粒　まばら 焼成　良好	整理　G-7 取上　J-5グリッド
6	須恵器 坏	口径　(12.6) 底径　(8.2) 高さ　3.9	20%程度	ロクロ成形 底面回転糸切り	外面　灰　5Y5/1 内面　灰　5Y5/1	石英・長石　小砂粒　多 焼成　良好	整理　G-5 取上　表採
7	須恵器 坏	口径　— 底径　(11.2) 高さ　[1.4]	20%程度	ロクロ成形 底面切離し後，静止ヘラケズリ 体部下端ヘラケズリ	外面　灰黄　2.5Y6/2 内面　黄灰　2.5Y6/1	石英・長石　細砂粒　多 雲母細片　やや多 焼成　良好	整理　G-6 取上　J-11グリッド
8	須恵器 甕/甑	口径　— 底径　— 高さ　—	10%以下	ロクロ成形 口縁は胴部上端から外側に短く屈曲する	外面　暗灰　N3/0 内面　灰　10Y5/1	石英・長石　砂粒　多 特に石英大砂粒 やや多 焼成　良好	整理　G-8 取上　表採

第Ⅲ章　まとめ

西山遺跡における今回の調査の概要は以下のとおりである。

今回の調査により検出された遺構は，古墳時代前期の竪穴住居跡３軒，平安時代の竪穴住居跡３軒，時期不明の土坑３基で，調査区域 1,100㎡の中で検出された遺構数としては，あまり密度は高くない。

また，出土した遺物の破片の総数は 3,487 点で，古墳時代及び平安時代の土師器が 2,898 点，全体の 83.1%，須恵器が 142 点，4.0%であった。その他に石器が９点，礫 81 点，鉄滓 258 点，鉄器 12 点，土製品４点などが主な遺物であった。しかし，区域内からは縄文土器及び弥生土器の出土がまったく確認されていない。

古墳時代

古墳時代の竪穴住居跡と判断されたのは２号住居跡，５号住居跡，６号住居跡の３軒である。住居跡内からの出土遺物が少ないため，時期の判定の難しいものもあるが，いずれも概ね前期に属すると判断した。

住居跡の規模は 5.5 m から 8.6 m と開きがある。また，主軸方位についても北東に 36° から北西に 52° と大きな開きがみられる。住居跡の形状では方形から長方形とやや差がみられる。

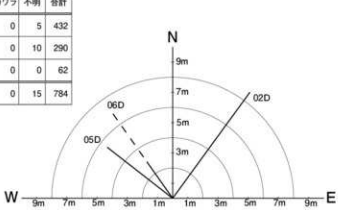
内部構造は，規模の大きな２号住居跡で柱穴や間仕切り，貯蔵穴などの内部施設が充実し，一方，規模のやや小さな５号住居跡，６号住居跡では内部施設があまり明瞭ではない。柱穴が確認できたのも２号住居跡のみで，３本の柱穴が検出されている。しかし，他の２軒では検出されていない。貯蔵穴も２号住居跡でのみ確認され，住居跡の北側の隅で検出されている。

この３軒の住居跡から出土した遺物の総数は 784 点であった。２号住居跡で 432 点，５号住居跡で 290 点，６号住居跡で 62 点の出土であった。また,遺物の種別では，土師器片が 749 点，95.5%，須恵器片が６点，0.8%であった。その他の遺物のうち，鉄器では刀子が１点５号住居跡から出土しているが，一括で取り上げているため住居跡に供伴するか不明である。

２号住居跡の遺物出土の傾向は，同時期の中で出土量が最も多く，図化できた土器も多いが，それに反して復元率や遺存率は全般に低い傾向がみられた。高坏は部分的な破片がほとんどで，小型甕も小破片が多い。大型の壺も１個体出土しているが，遺存率は 50%に達していない。また,土器の内面又は外

第 13 表　古墳時代の出土遺物

	土師器	須恵器	石器	礫	鉄器	鉄滓	土製品	粘土塊	炭	カワラ	不明	合計
2D	419	2	0	4	0	0	2	0	0	0	5	432
5D	274	1	0	4	1	0	0	0	0	0	10	290
6D	56	3	0	3	0	0	0	0	0	0	0	62
合計	749	6	0	11	1	0	2	0	0	0	15	784



第 14 表　古墳時代前期住居跡の主軸方位と規模

面に赤彩されているものも多く出土する。特異な器種では器台としての利用が想定された土器(02D13)が1点出土している。また，土製品では棒状の破片(02D16・02D17)が出土した。

5号住居跡は遺物の出土量があまり多くはないが，その割にはそれぞれの遺物の復元率は良かった。器種では高坏類もあるが，台付甕を想定できるものも多いようだ。土器片の中には赤彩されたものも若干出土していた。また，この住居跡ではミニュチュアの土器片が数点出土した。

6号住居跡は遺構自体の残存率も良くないこともあり，遺物の出土量が最も少なかった。器種では直立気味に立ち上がる脚部をもつ高坏が出土しているが，一括の取り上げでもあり，住居跡の時期の特定には適さなかった。特に，他の時期を推定させるものもないので，当該期としている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の竪穴住居跡と判断されたのは1号住居跡，3号住居跡，4号住居跡の3軒であった。出土遺物から平安時代に属し，概ね9世紀第3四半期のものと判断した。

住居跡は3.5 mから3.9 mとほとんど同規模のものであり，主軸方位も北東に4°から北西17°とほぼ北方向を向いている。形状は，いずれも方形を呈する。内部構造では3軒とも住居跡の北壁側の中央付近にカマドが付設されている。それぞれの住居跡から柱穴は検出されていないが，床面の中央一帯に床硬化面が明瞭に確認されている。

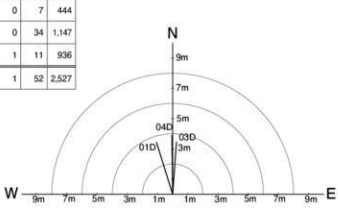
3軒の住居跡から出土した遺物の総点数は2,527点であった。1号住居跡では444点，3号住居跡で1,147点，4号住居跡で936点出土した。遺物の種別では土師器が1,993点，総数比78.9%，須恵器が125点，4.9%であった。その他，石器は3号住居跡から砥石(03D25・03D26・03D27・03D28)が4個体出土した。鉄器は全体で11点出土しているが，3号住居跡から8点出土し最も多い。そのうちの1点は兵庫鎖(03D33)である。鉄滓は1号住居跡から9点，3号住居跡から125点，4号住居跡から120点出土した。また，4号住居跡から支脚(04D18)が出土している。

1号住居跡から400点を超える遺物が出土しているが，同時期3軒の中では最も少ない。土師器の坏，甕の比率が高い。須恵器は坏が出土するが，少ない。土師器の坏はロクロ成形の切り離し後に底面の外周を回転ヘラケズリし，体部下端も同様に回転ヘラケズリにより整形する。甕は常総型と武蔵型の両者が出土する。鉄器の出土はみられず，鉄滓もわずかに9点出土していた。

3号住居跡の出土遺物が最も多く，1,000点以上ある。土師器の坏，甕の構成比率が高いのは共通し

第15表　平安時代の出土遺物

	土師器	須恵器	石器	轉	鉄器	鉄滓	土製品	粘土塊	炭	カワラ	不明	合計
1D	392	18	0	18	0	9	0	0	0	0	7	444
3D	907	29	9	22	8	125	0	2	11	0	34	1,147
4D	694	78	0	27	3	120	2	0	0	1	11	936
合計	1,993	125	9	67	11	254	2	2	11	1	52	2,527



第16表　平安時代住居跡の主軸方位と規模

ているが，一部に小型の台付の甕が出土する。坏の整形手法は1号住居跡のものとほぼ同様であった。

甕は常総型が出土している。また，砥石が唯一出土する。刀子などの鉄器が8点出土し，鉄滓も125点出土している。

4号住居跡の出土遺物も1,000点近くあり，出土量は多い。しかし，量の割には，復元率が低い。出土土器で土師器の坏，甕の比率が高く，他の住居跡と同様の傾向がみられた。坏の整形も1号住居跡と同様で，ほぼ同時期とみなされた。甕は常総型の出土が多い。他の住居跡に比べて，やや須恵器の出土する比率が高いようだ。鉄器は3点出土するが，鉄滓は120点出土している。

3号住居跡出土の兵庫鎖

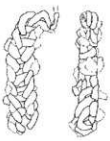
本跡で出土した鉄器は12点しかないが，その内の1点がこの兵庫鎖（第40図左03D33）であった。3号住居跡の西壁際のテラスの内部から出土している。このテラス状の遺構が住居跡の構造物かどうかは不明であるが，住居の構築または廃棄前後に存在したとすれば，この兵庫鎖自体も平安時代，9世紀第3四半期ごろの製品の一部とみられる。

この兵庫鎖は長さ6.6cm，幅15mmあるが，端部で屈曲し，鎖が引きちぎられたような形状をしている。もう一端も途中で終わり，何かにつなげられていた痕跡も確認できなかった。鎖は4mmほどの細い針金状のもので連続的に約10連組み上げられている。重量は21.0 gである。

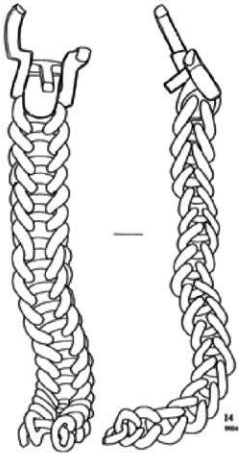
同様の兵庫鎖の技法で作られた出土例はの村上込の内遺跡にみられる。113号遺構の北西壁際の周構内から出土している。屈曲しているが，長さは30cmほどあり，19連から20連の兵庫鎖であった。一端に鉸具の断片が接続し，6mm× 45mmの刺鉄も付属する。重量350g。馬具の連結金具と判断されている。製作技法は同じであるが大きさ重量ともに格段に差がある。

兵庫鎖の用例は，このような馬具などのほかにも，太刀の帯取りや耳飾りにも用いられている。

本跡出土の兵庫鎖がどのような用途で使用されたのかは，現時点で不明であるが，装身具の可能性も否定できない。



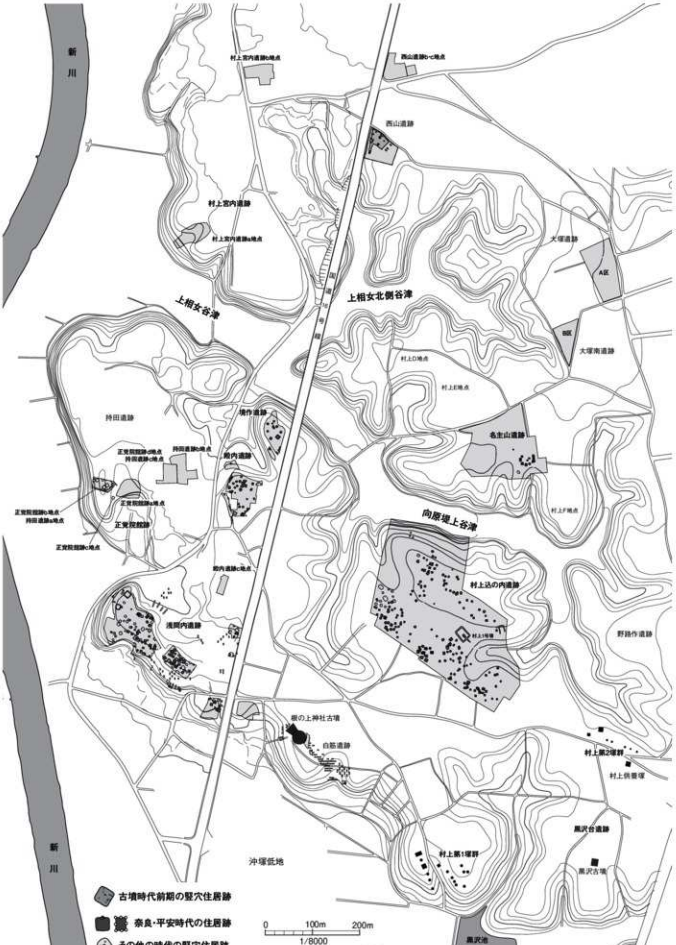
西山遺跡の兵庫鎖



0　5cm
1/2

村上込の内遺跡・113号遺構出土
㈶千葉県都市公社 1975「八千代市村上遺跡群」より

第40図　兵庫鎖



第 41 図　西山遺跡周辺の古墳時代と奈良・平安時代の遺跡

写　真　図　版

1. 調査区近景

2. トレンチ設定状況

3. トレンチ掘削状況

4. トレンチ土層

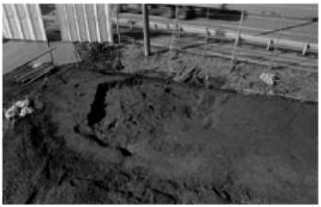
5. 遺構検出状況

6. 遺構検出状況

7. 完掘状況（1）

8. 完掘状況（2）

図版　2



1. 1号住居跡

2. 1号住居跡掘削状況

3. 1号住居跡遺物出土状況

4. 1号住居跡焼土検出状況

5. 1号住居跡土層

6. 1号住居跡No. 8 出土状況

7. 1号住居跡カマド土層

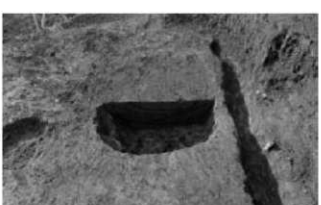
8. 1号住居跡カマド

1. 2号住居跡

2. 2号住居跡掘削状況

3. 2号住居跡遺物出土状況

4. 2号住居跡土層



5. 2号住居跡貯蔵穴土層

6. 2号住居跡貯蔵穴

7. 2号住居跡炉検出状況

8. 2号住居跡間仕切り検出状況

図版　4

1. 3号住居跡

2. 3号住居跡遺物出土状況

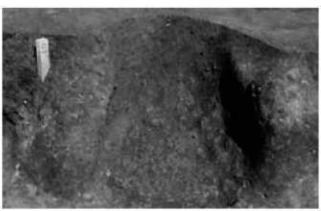
3. 3号住居跡テラス検出状況

4. 3号住居跡遺物№6出土状況

5. 3号住居跡土層1

6. 3号住居跡土層2

7. 3号住居跡カマド土層



8. 3号住居跡カマド

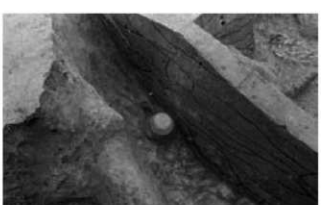
1. 3号住居跡遺物№20出土状況

2. 3号住居跡遺物№17出土状況

3. 4号住居跡

4. 4号住居跡遺物出土状況

5. 4号住居跡土層



6. 4号住居跡遺物№1出土状況

7. 4号住居跡カマド土層

8. 4号住居跡カマド

図版　6

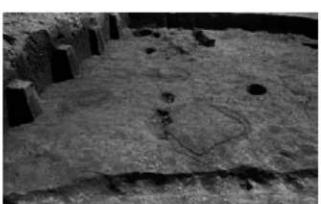
1. 5号住居跡

2. 5号住居跡遺物出土状況 1

3. 5号住居跡遺物出土状況 2

4. 5号住居跡土層

5. 5号住居跡周溝



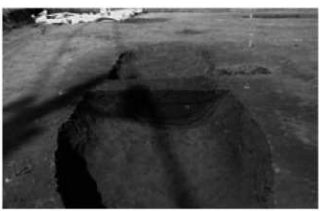
6. 5号住居跡炉検出状況

7. 6号住居跡

8. 6号住居跡遺物出土状況

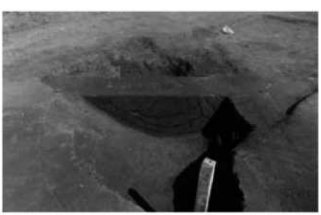
1. 6号住居跡土層

2. 6号住居跡近景



3. 1号土坑土層

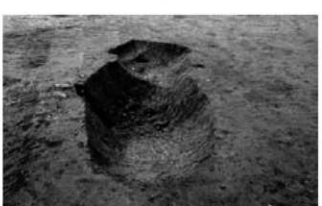
4. 1号土坑



5. 2号土坑土層

6. 2号土坑

7. 3号土坑土層



8. 3号土坑

図版　8

01D01

01D02

01D03

01D04

01D05

01D06

01D07

01D08

01D09

01D10

01D11

01D12

01D13

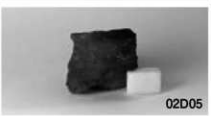
01D14

02D01

02D02

02D03

02D04

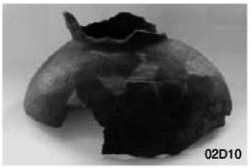

02D05

02D06

02D07

02D08

02D09


02D10

02D11

02D14

02D15

02D12

02D13

02D16

02D17

03D01

03D02

03D03

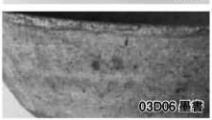
03D04

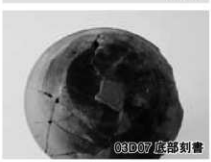
03D05

03D06

03D07

03D08


03D06墨書


03D07底部刻書

03D09

03D10

03D11

03D12

図版　10

03D13

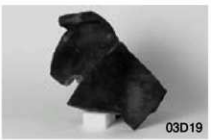
03D14

03D15

03D16

03D17

03D18


03D19

03D20

03D21

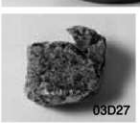
03D22

03D23

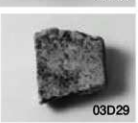
03D24

03D25

03D26


03D27

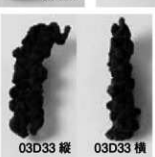
03D28


03D29

03D30

03D31

03D32


03D33 縦　03D33 横

04D01

04D02

04D03

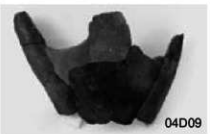
04D04

04D05

04D06

04D07

04D05 底部


04D09

04D08

04D11

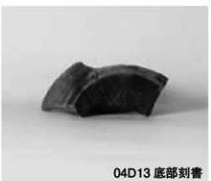
04D12

04D14

04D13

04D10

04D16


04D13 底部刻書

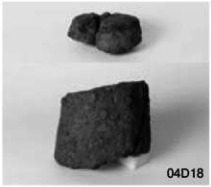
04D19

04D20

04D17

04D15

図版　12


04D18

05D04

05D08

06D01

G01

G04

G07

05D01

05D05

05D07

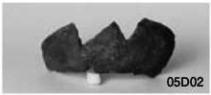
05D09

06D02

G02

G05

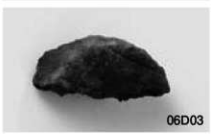
G08


05D02

05D03

05D06

05D10


06D03

G03

G06

報 告 書 抄 録

ふりがな	ちばけんやちよし　にしやまいせき
書名	千葉県八千代市　西山遺跡
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	秋山利光
編集機関	八千代市遺跡調査会
所在地	〒276-0045　千葉県八千代市大和田138-2　　Tel 047-483-1151 内6111
発行年月日	西暦２０１１年（平成２３年）１２月２７日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
にしやま 西山遺跡	やちよしかみおおたあざ 八千代市村上字 にしやま 西山881~45	12221	196	35° 44′ 47″	140° 08′ 16″	確認調査 19890918 ～ 19890926 本調査 19900116 ～ 19900406	工事面積　3,283.82 ㎡ 確認調査　160 ㎡／1,400 ㎡ 本調査区域　1,100 ㎡	店舗建設
				世界測地系				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
にしやま 西山遺跡	集落	古墳時代　前期 平安時代	古墳時代　前期 竪穴住居跡　3軒 平安時代 竪穴住居跡　3軒 時期不明 土坑　3基	土師器・須恵器・石器（砥石）・鉄器（刀子等）鉄滓	平安時代の住居跡内から兵庫鎖が出土した。
要約	西山遺跡は，新川の右岸の谷津の奥まった小さな舌状台地の上に立地する。 古墳時代前期の竪穴住居跡３軒，平安時代のカマドが付設された竪穴住居跡３軒，時期は不明であるが，長楕円形状の土坑が３基検出された。 出土遺物は，全体で3,480点ほど出土している。内訳は土師器が80%以上占め，須恵器は４%ほどであった。また，鉄滓が250点，全対比７%弱ほどで，平安時代の住居跡から出土していた。そのほか石器や鉄器がわずかに出土していた。				

千葉県八千代市

西　山　遺　跡

－埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成23年12月27日発行

編　　集　　八千代市遺跡調査会
八千代市教育委員会 教育総務課内
千葉県八千代市大和田138-2

発　　行　　加藤　三守
株式会社　ロケット

印　　刷　　金子印刷株式会社
千葉県八千代市萱田410-1